

# IPSHU研究報告シリーズ

研究報告 No. 25

丸山眞男と広島

—政治思想史家の原爆体験—

林 立 雄 編



THE INSTITUTE FOR PEACE SCIENCE,  
HIROSHIMA UNIVERSITY

March, 1998

広島大学平和科学研究センター

〒730-0053 広島市中区東千田町1丁目1番89号

Tel (082) 542-6979

I P S H U 研究報告シリーズ 25

丸山眞男と広島

— 政治思想史家の原爆体験 —

林 立 雄 編  
(安田女子短期大学)

# 広島市街原爆被災状況・丸山一等兵行動説明図



参考：広島市発行「広島原爆戦災誌付録（一）」  
 作成：安田女子短期大学 齊藤美后、鳥本紗知江、御神本沙弓

## 目次

はじめに	林立雄	5
一、原爆体験の記録	林立雄	
(一) 被爆者の懺悔		7
(二) 被爆者は寡黙		10
(三) 追悼のされ方		11
(四) 結晶化されなかった原爆体験		13
二、録音記録「二十四年目に語る被爆体験」	丸山眞男	
(一) 一九四五年四月、丸山二等兵 船舶司令部参謀部情報班に配属		16
(二) 八月六日朝、ピカドン!		18
(三) 二十年後八月十五日、初めて語った八月六日		21
(四) 八月六日午前八時十五分後、キノコ雲の下は修羅場		22
(五) 八月七日、丸山一等兵 米大統領「原爆投下」放送傍受		25
(六) 八月九日、丸山一等兵ら被災地巡視		28
(七) 八月九日、毎日新聞記者に託して父へ伝言		31
(八) 二十四年後に語る原爆体験		33
(九) 八月十五日→十六日、丸山一等兵 先生に変身		36
(十) 八月十五日後、丸山一等兵 参謀に天皇制を講義		39
(十一) 四五年九月、丸山一等兵 復員		42

三、丸山眞男の広島

林 立 雄

- (一) 被爆後初の広島訪問…………… 47
- (二) 「拜復 被爆者はヒロシマを避けます」 …… 48

四、講演記録【一九五〇年前後の平和問題】

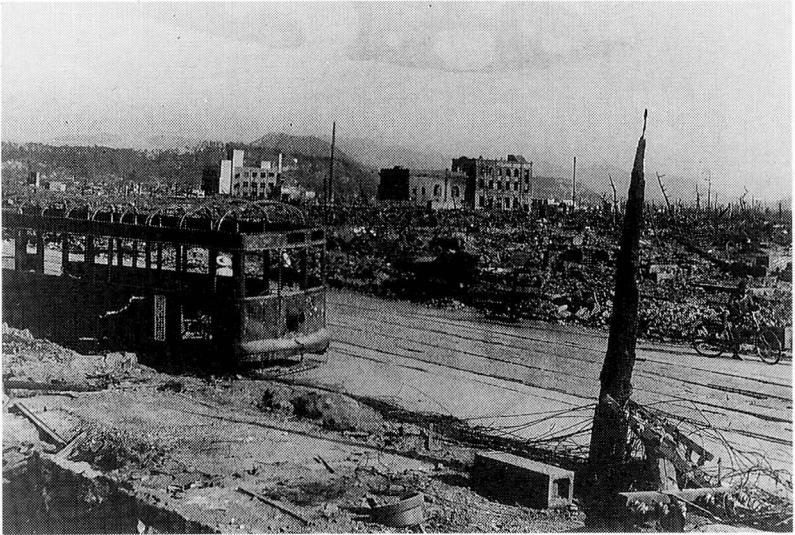
丸 山 眞 男



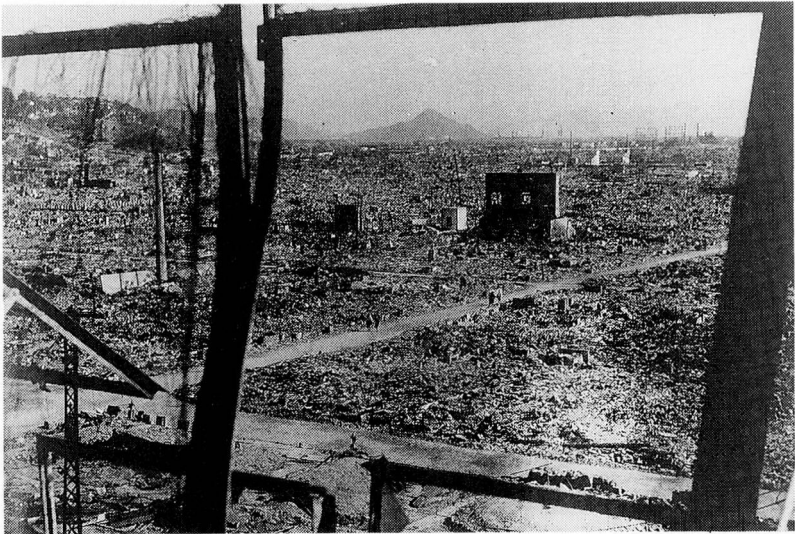
〔写真1〕丸山 ここに高い司令塔がある。あれで助かったんですよ。  
船舶司令部、旧凱旋館。撮影'73年5月。提供：中国新聞社



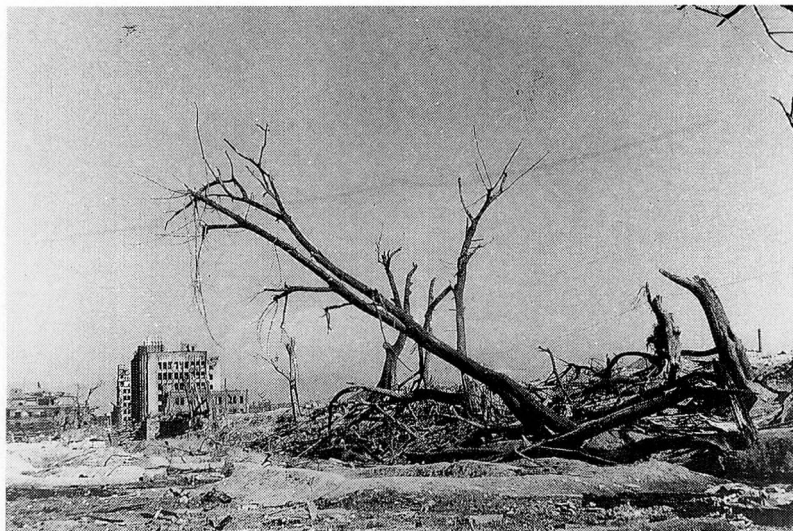
〔写真2〕—— これ（右端）、先生ですか。  
丸山 僕です。三十一歳で、一等兵。  
船舶司令部情報班で。日本図書センター『丸山眞男戦中備忘録』から



〔写真3〕丸山 こういう風にきれいになっているでしょう。兵隊が掃除したんですね。紙屋町付近。撮影：川原四儀。『丸山眞男戦中備忘録』から



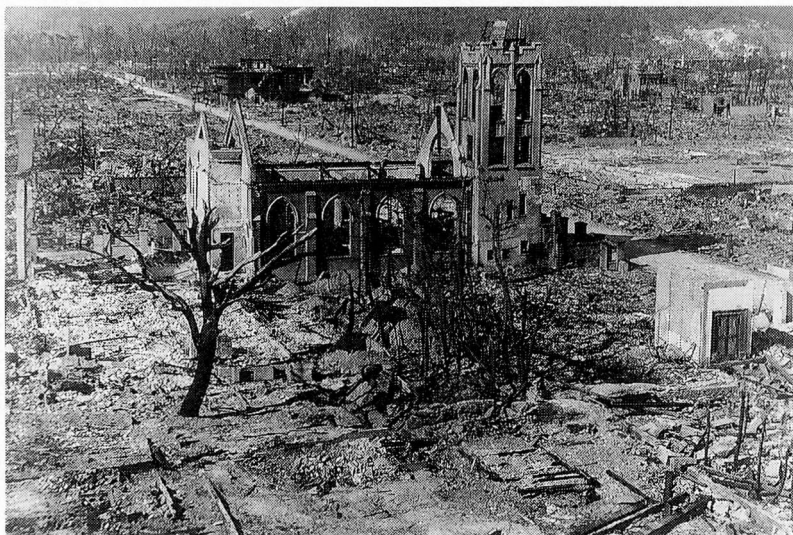
〔写真4〕丸山 一望千里ですから。これ似島（中央）。これは比治山（左端）流川町、中国新聞社から撮影。  
撮影：川原四儀。『丸山眞男戦中備忘録』から



〔写真5〕—— これ、福屋です（左のビル）。

丸山 そうすると、これ八丁堀筋ですね。

紙屋町から撮影。撮影：川原四儀。『丸山眞男戦中備忘録』から



〔写真6〕丸山 これは、教会の跡で。

—— 流川教会です。

中国新聞社から撮影。撮影：川原四儀。『丸山眞男戦中備忘録』から





〔写真7〕丸山 テントをはってね。そこで、火傷の薬を塗ってるんですね。  
第二陸軍病院で。撮影：川原四儀。『丸山真男戦中備忘録』から



〔写真8〕丸山 相生橋ですか。僕が見たのは、欄干がこうなっていました。  
対岸の建物は本川小学校。  
撮影：川原四儀。『丸山真男戦中備忘録』から

## はじめに

丸山眞男さんは、オノマトペをよく遣<sup>つか</sup>った。「ピカドンとは、言い得て妙ですね。ピカッときた。瞬間、司令部前広場での朝礼で、講話をしていた参謀の軍帽がピューと飛び上がった。間をおいて、ドン…」といった具合である。ピカッはピカピカ、ピューはシューとも言い換えた。

その伝でいくと、丸山さんの原爆体験談を取めた録音テープを、NHKスタジオのテープレコーダーにかけて回し始めたら、茶色の磁気部分がピューと剥けてパラパラと飛び散った。技術スタッフが声を上げた。「ヤアヤ、劣化してる」。パッとスイッチを切った。

このテープは、NHK教育テレビが一九九六年十一月十八日午後八時から放映したE T V特集「『丸山眞男と戦後日本』①民主主義の発見」で、丸山さんが語っていた三場面、計約九十秒ほど回っているところがアップで映し出された、それである。

オープンリールの古い型のものだ。収録したのは、二十七年も前。時間がたつと、文明の利器も当てにならない。テープを起こして、文字化しよう、と思いついたわけの一つである。

広島・長崎で原爆投下に遭遇した体験は被爆体験と、言い慣らされている。丸山さんは「原爆体験」という。中国新聞東京支社編集部記者であった筆者が、原爆体験とその思想化についてたずねるため、インタビューしたのは、六九年八月三日午後である。場所は築地・国立癌センター十一病棟五号室（当時）。

六九年は、東大紛争の年だった。丸山さんの年譜（『丸山眞男集別巻』岩波書店、'97、70頁）には「三月 三回目の講義も『吊るし上げ』状態となり中止。一〇日、心不全と肝炎のため武蔵野赤十字病院へ入院する。（中略）六月 肝炎のため国立癌センターに入院する」とある。その入院中のインタビューであった。医師の指示で、面会時間は一時間。

丸山さんは、ベッドに横たわって語り始めた。話に興が入ると、少し身を起こして半身になる。書齋に保管していた被爆状況の写真の説明をする際には、完全に起き上がった。病室の撮影は断られた。

たずねたい点は、当代きっての政治思想家の原爆体験が、その思想形成にどう影響しているかについてである。

丸山さんも時間を気にしてか、語り続けた。記憶鮮明なピカドン、悲惨な被爆状況、それが思想化へと醸成されない心的状況、そして敗戦と母親の死去が重なった八月十五日、翌十六日から秩序が一変した軍隊組織での体験へと話は進む。

面会制限時間がすぎたころ、丸山夫人のゆかりさんと中国新聞東京支社編集部記者の三宅昌臣さんが相次いで入室した。挨拶もそこそこに話し急いだ。メモ代わりにと、回し続けていた録音テープのA面が終り、B面と入れ替える間も、丸山さんは、話を切らなかつた。制限時間超過。二時間たつと、看護婦が「先生が、もうこれくらいで…」と告げて、ドクターストップがかかった。

もう一つ、録音を文字化しようとしたわけがある。これから、述べるように、筆者の知る限りでは、丸山さんの原爆体験についての記録は少ない。丸山さんが筆をとり、公にされたものはないようだ。丸山さんが、体験について語った声が収めてある録音テープは、筆者が二十八年前にインタビューした、このテープが唯一のものであろう。録音テープを起こして、文字化しておけば、丸山真男の伝記的研究に役立つであろう、と思った次第である。

## 一、原爆体験の記録

### (一) 被爆者の懺悔

丸山さんが、インタビューで二時間語り続けた内容の三分の二は、原爆体験と、その思想化についてである。あと三分の一は、進んで言い及んだ軍隊体験談だ。原爆体験についても、軍隊体験の枠内での原爆体験を語った、と言い換えるのが適切かもしれない。

原爆体験は声を落として語る場合もあった。思想化については言いよどんだ。

興に乗り、「軍隊生活最良の日でした」と笑い声を上げながら語った軍隊経験の部分は、聞いていても面白かった。そこを、石田雄さんが「丸山眞男と軍隊経験」(『丸山眞男戦中備忘録』日本図書センター、'97、169頁)で解説している次のくんだり読み合わせながら録音を聞くと、『超国家主義の論理と心理』が発酵・醸成したところは広島陸軍船舶司令部のなかではなかったかという思いにかられる。

「丸山が二回の軍隊経験を全面的に生かして『超国家主義の論理と心理』を書いたのは、それから半年程経過し、すでに主権在民、戦争放棄を含む新憲法草案要綱が発表された直後であった。しかしこの論文の最後を『日本帝国主義の終止符が打たれた八・一五の日にはまた同時に、超国家主義の全体系の基礎たる国体とその絶対性を喪失し今や初めて自由なる主体となった日本国民にその運命を委ねた日でもあったのである』と結んだのは、まさに軍隊生活の最後の体験を基礎としていたものと思われる」。

実は、インタビューを記事にするに当たって、丸山さんは条件をつけた。被爆者丸山眞男の個人的な原爆体験、軍隊経験をダイレクトに書かない。丸山一等兵の耳目を通して、見聞きした被爆状況に限って活字にするという条件であった。

丸山さんは、インタビューで、被爆者健康手帳を持っていない、と打ち明けた。その一方で、結核や肝臓疾患にかかったり、白血球が少ないのは、原爆に関係があるのではないかと気にかけていた。それに重ねて、「僕は、(被爆者

であるよりも) 至近距離からの傍観者に過ぎない」とか「ほんとに路傍の石に過ぎない」と言って、広島に被爆者と名乗ることをためらった。だが、そうした屈折した被爆者としての心情は、記事にはしなかった。

記事は、広島市民とは別枠の軍隊組織に所属する一員が、その枠の内外で突発した歴史的出来事を見聞きし、記憶し、二十四年後に、それを語ったことを記録する形をとった。

「24年目に語る被爆体験 ——東大教授丸山眞男氏(当時一等兵)の『思想と行動』」の見出しで、六九年八月五日、六日付け中国新聞夕刊に連載した。記事量三、五五〇字。(『丸山眞男集 第十六巻』岩波書店、'96、359～363頁に収録)。

連載の末尾は、丸山さんの示した執筆条件から外してしまい、世界初の核戦争に遭遇した政治思想史家が吐露した「ことば」で結んだ。

「丸山教授も広島について主張し始める——。広島は単なる戦争の惨禍の一ページではない。東京空襲は過去の惨禍となっているが、広島では現に長期の被爆患者がいる。新しい患者も出る。そして被爆二世さえ白血病で死ぬ。こんなところは歴史にも現在もない。この現実をどう説明するか。あと傷というにはあまりになまなましい。『神皇正統記』に『天地の始は今日を始とするの理なり』ということばがある。これをもじって『広島は今日を始とするの理なり』といたい。広島は毎日々々新しい問題をわれわれに突きつけている」。

この「広島は単なる戦争の惨禍の一ページではない。…」というくだりは、NHK・ETV特集「丸山眞男と戦後日本」を企画・構成した教養番組部の森博明さんが、二時間分の録音テープに耳を傾けた末に、抜き出した個所でもある。

それは、人類史的大事件である初の核戦場に居合わせた政治思想史家が広島に対する認識を表現している文節であるからだろう。

この年七月、筆者が企画・取材した「私の原爆手帳」を中国新聞に連載した。広島で被爆した七氏の体験と、その体験が、それぞれの研究、芸術活動、業績にどう影響したかについて取材した。

- ①衛藤藩吉(東大教授・国際政治) ②正木亮(弁護士、元広島控訴院検事長)  
③竹西寛子(作家) ④木本誠二(三井厚生病院院長、元東大教授・内臓外科)

⑤平山郁夫（日本画家、東京芸大助教授）⑥小幡久男（防衛庁事務次官）の七氏を取りあげた。

被爆者である丸山さんを、ぜひ紹介したかった。戦後日本の代表的学者文化人とされていた。政治思想史の第一人者。現実政治、とくに、六〇年安保では積極的に論じ、行動した政治学の権威だった。マスコミの関心が東大紛争に向けられていた時期でもあり、言動が注目される「時の人」東大法学部教授である。

この時期、丸山さんは入院中で、取材を申し込める状態ではなかった。何日も待った末、インタビューの運びとなった。

広島の記事としては、聞きただしいことがある学者文化人もあった。五年、アメリカがビキニ水域で水爆実験をした。マグロ漁船「第五福竜丸」が被爆した。これをきっかけに、原水爆禁止運動が起こり、運動は昂揚した。多くの学者文化人が運動に参加し、賛否をめぐって発言した。六〇年安保では発言した丸山さんだが、原水禁運動については無言だった。

核問題について、どう考えているのか。原水禁運動についてなぜ発言しないのか、聞きたかった。

丸山さんは、聞きただす前に、「原爆の意味というものを、もっと考えなかったことは懺悔ですけれども」と発言した。「懺悔」という言い方が耳に残った。執筆条件に外れるが、このくだりも記事にした。

ついで、「戦争後に、あれだけ『戦争』について論じたのですけれども、『原爆』ということの持つ重たさというものを論じませんでした」とも語った。

さらに、「そういうことを考えるようになったのは、(略)ビキニの問題以後」と付け加えた。広島で、被爆直後に毛髪が抜ける人を見た経験とビキニ被災とが結びついた、と説明した。

不言実行というわけか、丸山さんは、七三年に設立された財団法人第五福竜丸保存平和協会に参加、賛助会員になっていた（年譜『丸山眞男集別巻』72頁）。

## (二) 被爆者は寡黙

丸山さんが広島に被爆者であることは、余り知られていなかった。それは、全16巻の著作集を遺した多作家なのに、自ら体験を書き記し、公にすることはしなかったし、体験談としても、身近な人と外国人にしか聞かせていなかったからであろう。

インタビューした六九年当時、丸山さん自らが指折り数え上げた体験談が活字化され、公にされたものは三点だけだった。それも、話のついでか、言葉のはずみで原爆体験に触れたくだけだが、活字化された断片的なものである。

「あれが、ほとんど初めてですね。原爆体験を公に話したのは」(21頁参照)という場面は、六五年の八月十五日記念国民集会。東京・九段会館のフロアに千三百人にまじって座っていたら、丸山教授を目にした司会者に発言を求められた。戦後民主主義について話し、その枕に原爆体験を振った。話は、「世界」同年十月号に『二十世紀最大のパラドックス』(199～203頁)と題して掲載された。

六七年には「思想の科学」五月号に載った鶴見俊輔氏との対談「普遍的原理の立場—語り継ぐ戦後史」で、原爆体験の思想化について語っている。「いま顧みて、いちばん足りなかったと思うのは、原爆体験の思想化ですね。私自身がストレスの限界にいた原爆経験者であるにもかかわらずね」と。ついで、広島で見聞きした被爆状況を話した。

丸山さんの原爆体験発言は内外格差がある。国内では寡黙だが、海外では積極的に発言した、という。「原爆について、日本人がどんなことを言っても反駁しませんね。かなりやってみましたけれども」(22頁参照)。

六二年、オクスフォードに滞在して『現代政治の思想と行動』英語版(“Thought and Behaviour in Mordern Japanese Politics”, London: Oxford University Press)を刊行する準備をした。その折り、版元の出版部長に原爆体験を、「だべったら、やっぱりハツと思うのでしょ」という次第で、部長が表紙に書いた短い著書紹介に、広島で原爆に遭ったことが載せてある。

“He was called up for military service in the last war and was stationed at

Hiroshima in August 1945, being only three miles from the center of the city when the atomic bomb fell.”

これら三点に、六九年八月五、六日、中国新聞夕刊に連載した「24年目に語る被爆体験——東大教授丸山眞男氏(当時一等兵)の『思想と行動』」が付け加わった。原爆投下から四半世紀近くもたっても、まだ知られざる丸山眞男教授の原爆体験を丸ごと公にした、この地方紙に載った情報は、東京には、広く深く伝わらなかった。

広島新聞紙面には、その後も、被爆者丸山眞男について掲載される機会があった。丸山さん夫妻は七七年五月、広島を訪れた。二十五日、開かれた広島大学平和科学研究センター第十二回研究会の講師に招かれ、三日間滞在した。それは被爆後初めてで、そして最後の広島訪問となった。中国新聞は、二十九日付け朝刊文化面に「『ヒロシマに来るのが怖かった』32年ぶりやっと訪問 沈黙守った丸山さん〈被爆体験の政治学者〉」をひき続いて、三十一日付け同面に講演要旨「'50年前後の平和問題欠丸山眞男氏の広島大講演から」を掲載した。

### (三) 追悼のされ方

丸山眞男さんは、広島再訪から十九年、そして広島での被爆後五十年たった九六年八月十五日、敗戦の日に亡くなった。年譜(『丸山眞男集別巻』87頁)には「進行性肝臓癌のため死去。享年八二歳。(略)一八日、その死が公表される」とある。

訃報は、十八日のラジオ、TV、十九日の朝刊で伝えられた。学者の訃報が、これほど大きく取りあげられたのは、戦後では、ノーベル賞受賞者の湯川秀樹氏以来のことである。スポーツ紙も死亡記事を載せた。「日本政治思想研究の第一人者で、日本社会の特質を鋭く分析し、戦後思想に大きな影響を与えた丸山東大名誉教授が十五日死去した」(スポーツニッポン)。

各紙が、学者の死去に追悼社説を掲載したのも異例である。朝日「戦後精神の柱を失った」(十九日)、毎日「『知の奉仕』を貫いた生涯」(二十日)、読売「丸山眞男氏が遺したもの」(同)、東京「戦後の知の“象徴”丸山氏の死」(同)と



四紙が載せた。各紙は政治、社会、文化面で追悼記事、業績紹介に紙幅を大きくさいた。

出版社も相次いで、追悼特集や丸山眞男論を掲載した。なかには、「特集『丸山眞男』—追悼のされ方の研究」（『月刊フォーラム』'97年2月号）という企画を組む出版社がある程の丸山ブームだった。

それなのに、多くの訃報や追悼文を見渡しても、原爆体験に触れたものは、指折り数えるくらいしか見当たらない。やはり東京では、被爆者として知られていなかったからであろう。

数少ない原爆体験に触れた追悼文をみると、身近な人と外国人のものが目立つ。

一高同窓会誌「向陵」（平成九年四月号）に寄稿した村本周三さんは、丸山さんと一高同期でともに寮委員だった仲という。しかも、村本さんは広島一中出身で、被爆当時、広島・金輪島の船舶通信連隊勤務だったというので、広島事情に通じていて、丸山一等兵の勤務状況や被爆後、被爆者手帳を取得しなかったいきさつにまで書き及んでいる。

丸山さんの府立一中の後輩、熊代邦男さんも、同窓会誌「如蘭会会報」（平成九年五月号）に追悼文を寄せ、「丸山眞男の原点の形成過程に触れてみたい」と書いた。丸山思想は「広島・船舶司令部での半年にわたる軍隊生活・原爆体験、復員、半年の思想的格闘をへて『超国家主義の論理と心理』を発表」する過程で形成された、という。ここで、原爆体験と思想形成との関連が取りあげられた。

外国人では、月報「みすず」97年10月号の「追悼・丸山眞男」に「丸山先生との夕べ」を寄せたスザンヌ・H・ヴォーゲルさん。邦字五百八十字分、丸山さんに聞いたという原爆体験談を書き込んである。それによると、ハーヴァード大学保険医療センター勤務のヴォーゲルさんは六〇年代、同大学客員教授だった丸山さんと知り合った。三十年後の九四年夏、東京に滞在していたヴォーゲルさんは、丸山さん夫妻に夕食に招かれた。その席で具体的な原爆体験談を聞いた。

臨床ソーシャルワーカーのヴォーゲルさんは、被爆者丸山先生の生きざまをコ

メントする。「先生がこの爆弾の下で生きのびたのは、司令部が広島市の南部にあり、その日は風が北に吹いていたからである。しかし、おそらく放射能に冒されたことが、戦後に発病した結核の一因をなしたのであろう。結局、一九五四年には、片肺と肋骨六本の切除を余儀なくされた。先生は「被爆者」の資格を請求できたのであろうが、そうすることを「恥じ」た。それは、はるかに深い傷を負わされた多くの人々の存在に対してである」。

#### （四） 結晶化されなかった原爆体験

政治学者の石田雄さんは、丸山さんの特異な体験を、「丸山眞男戦中備忘録」（日本図書センター、'97）の「解説」（168頁）で、次のように書きとめている。

「ポツダム宣言受諾決定の直接の契機となった原爆投下を宇品で経験し、八月九日には広島市内に入って自分の目で爆心地附近の惨状を見た。そのときに丸山がみた光景は、本書の写真が示す通りであった。

この写真を生涯手許に保管し続けた丸山は、そのときの印象を大切に記憶に留めていたに違いない。私が丸山の生前にこの写真を示されたのは、アメリカ人の研究者と共に自宅に招かれたとき一回だけであった。彼は被爆手帖も申請しなかったし、被爆体験を語ることも極めてまれであった。活字にされているものとしては次のような談話記事がある。

「司令部前の広場で、朝八時から、点呼、朝礼が行なわれた。丸山一等兵らは、建て物に向かって整列、参謀の講話を聞いていた。突然、目のくらむような閃光。参謀の軍帽がスッと斜めに浮き上がったのを記憶しているようだ。列は算を乱して、壕にとび込んだ。丸山一等兵はマゴマゴしてして一番ピリになった。土まみれになって壕からはい出すと、塔状の司令部の建て物の背後にキノコ雲がゆっくり上がっては、横に開いていった。…司令部前の広場は、避難してきた市民で埋まっていた。半裸体の若い女性は毛布をまとい放心状態。ベロツとむけた背中に真夏の太陽が照りつけた。広場を埋めたうめき声が、まだ耳に残っている。…丸山教授は〈あとから考えると〈よく生きていた〉と感

じることがある」と、声を抑えて語る。あの司令部の高い建て物が閃光の直射、猛烈な爆風をささぎってくれた」(中国新聞、一九六九年八月五日・六日「24年目に語る被爆体験」)。

ついで、石田さんは、この「解説」のなかで、丸山理論の下敷に原爆体験がある、と指摘する。

「一九五〇年『三たび平和について』の中で、核兵器の出現によって『戦争が本来手段でありながら、手段としてとどまりえなくなったという現実』を指摘し、『原子力戦争は、最も現実的たらんとすれば理想主義的たらざるをえないという逆説的真理を教えている』と書いた。この部分を書いたとき、丸山の脳裡をかすめたのは、四五年八月に広島でみた光景に違いない」。

丸山さんの原爆体験に触れた追悼記や業績紹介が少なかった中で、中国新聞は「丸山真男氏の訃報」(九六年八月二十六日)を載せた。かつて被爆者・丸山教授を取材した記者OBの筆者の寄稿。見出しは「ヒロシマを思想に結晶化しないまま」である。丸山さんの原爆体験を改めて紹介した上で、多作家であったのに自身は、その体験を活字にして残していないし、語ることさえ少なかった、と伝えた。「当代を代表する知性は被爆者だったが、その原爆体験を思想に結晶化し、それを世に問わないまま八月十五日に世を去った」と、追悼記を結んだ。

この追悼記は、二十七年前の八月、録音テープに収めた丸山さんとのやりとりを聞き直しながら書いた。(34頁参照)

—— 被爆体験が、思想形成に意味あるものになっていますか。

丸山 こればかりは、もう無理に意味をでっちあげてもしょうがないことで、やっぱり自分の中にずーっと、こう…発酵させていく。たまっているものを発酵させる以外に、本当のものは出てきませんからね。

「原爆体験を思想に結晶化する」という言葉遣いは丸山さんに借りたものだ。先に述べた「語りつぐ戦後史1 編集解説 鶴見俊輔」(思想の科学社、'69、88頁)で、こういう風に遣っている。

「現在、日本人がヒロシマを重い経験として感じている。そうして大江健三郎さんとか、井伏鱒二さんとか作家がその重みを作品に結晶化しようとしている。そういう意味での原爆体験ってものを、私が自分の思想に練りあげる材料にしてきたかっていうと、してないんですよ。その点がね、自分はいちばん足りなかったと思いますね」。

そのように反省した丸山さんは、生涯、いちばん足りなかった原爆体験の思想化を気にかけて続けたのではなからうか。

また、石田雄さんの「解説」（『丸山眞男戦中備忘録』、168頁）の言説を引用する。

「戦争体験がその後の彼の研究に与えた影響について述べたものは皆無と行ってよいだろう。したがってこの点に関しては、丸山の伝記的研究の中で今後さまざまな視角から探求していくほかはない」。

二十七年も前に、丸山さんの声を収めた録音テープが、丸山さんの戦争体験、その中でも原爆体験に視角を当てる際に材料として役に立つ機会があるかもしれない。

## 二、録音記録『二十四年目に語る被爆体験』

※文中の括弧内は、筆者(林)が付けた補足説明。

また、小見出しと注も筆者による。

### (一) 一九四五年四月、丸山二等兵 船舶司令部参謀部情報班に配属

丸山 (話す) 順序をメモしたんですがね。順序不同で、話しましょうか。あなたの方で適当に(アレンジ)して下さい。

—— 当時の所属は、暁部隊(陸軍船舶司令部<sup>1)</sup>の通称)ですね。

丸山 宇品の暁部隊に召集されまして、二ヵ月足らずの速成の暗号教育を受けました。普通暗号教育は、六ヵ月かかるんですけども、戦局急になってきたんで、急処養成して沖縄に送るということで、そこで中等学校卒業者以上をピックアップして召集したんです。そこで、ひっかかったんだ。すでに初年兵教育を受けている人をねらい打ちにしたもんですから、かなり少ないわけですよ。全然これから初年兵教育では、しょうがない。一応僕は、初年兵教育を受けていますからね。

—— それは、平壤ですか。

丸山 ええ、平壤ですね。それで、その暗号教育を二ヵ月受けて、昭和二十年四月に船舶司令部の参謀部情報班に転属になったんです。船舶司令部は、元は陸軍輸送部と言っていて、それを改めた。わたしが、そこに転属されたのは、商売(東大法学部助教授)をみたのでしょう。ほかの人は、暗号教育を受けたのですから、卒業したら通信隊へいくのです。

わたしは、朝鮮の平壤で初年兵教育を受けたんですが、栄養失調のために入院して、一期の検閲を受けてないんです。一期の検閲は三ヵ月後で、それを受けると、今度は一等兵になるわけですね、普通は。それを栄養失調で病院に入っちゃったもんですから、一期の検閲を受けてないために、広島でも、いざとなってみると、二等兵です。ですから、途中で一等兵になったんです。終戦の年の六月に、ようやく一等兵になりました。

どうして幹候(幹部候補生)を志願しなかったのかと、しつこく聞かれ

て弱りましたよ。反戦思想で（はないか）と。当然幹候を志願するはずだと、向こうは、思っていました。兵隊として苦勞しました。あそこはどうなっています。

—— 第六管区海上保安本部（南区宇品海岸三丁目）になっています。

丸山 懐かしいですね。僕は、行きたいけど、怖くてね。怖いですよ。初め、暗号教育を受けた兵舎は、そこではなくて、宇品二丁目の辺です。だから、その兵舎にいたほうが、もっと危なかったですね。

二月に赤紙が来たんです。二月の初めに召集を受けて、二月と三月いっぱいまで暗号教育。卒業して、最後の日、点呼のときに「丸山二等兵、何んとか参謀部情報班に転属を命ず」と、言われましてね。何のことが、分からなかったんですよ。

参謀部情報班に転属というので、行くと、そこは船舶司令部の入り口ですよね。ここに高い司令塔<sup>(写真1)</sup>がある。あれが、遮ったのです。だんだん話していきますけどね。結局、あれで助かったんですよ、一つには。

原爆になる前でですけど、参謀部ですから、一応デスクワークをやっていたわけなんです。ただ、情報班といっても、大きな情報は将校が扱うんで、大した情報を扱うわけじゃないんです。しかも「使役」という号令が聞こえますと、すぐ鉛筆をおいて飛び出して行って、便所の汲み取りとか壕掘りをやるわけですね。その合間に鉛筆で仕事をした。

当時の同盟通信<sup>3)</sup>なんかから、小さな、こんな布で細かく国際情報が来ていました。あれを全部見ていました、情報は。国際的なあれは、割合詳しく分かったですね。普通の新聞よりはるかに詳しいです。

ポツダム宣言<sup>4)</sup>なんか全文を、それを見た。それで、僕は、ポツダム宣言を、割合よくおぼえている。八月十五日以後は、もう、毎日々々、ポツダム宣言の講義で閉口しましたよ。「何だ、丸山、ポツダム宣言って、何だ」と将校が来るもんだから、いちいち講義して。

その程度のは、知っていましたが、しかし、そんな特別の情報を扱っていたわけではない。便所の汲み取りとか壕掘りをもやりましたけれども、朝鮮の教育召集のときに比べたら、問題にならないほど楽だったです。デ

スクワークですから。情報班の、この写真に女の子もいるわけでしょう。

ちょっと普通の兵隊とかなり違いますね。

—— (写真<sup>2</sup>の) これ、先生ですか。

丸山 僕です。三十一歳で、一等兵。(笑い)

これ、報道班長の酒井(四郎)中尉。情報班長が、ここにいませんね。これ情報班で、慶応を出た少尉です。これは情報班の軍曹ですね。だから、大体将校の情報班長が中尉で、それから少尉が一人、あと下士官、兵七、八人です。

それから、報道班がやっぱり四、五人です。情報班と報道班は、隣り合っていました。報道班は、新聞記者会見とか、そういうことをやるわけですね。ですから、吉野上等兵なんていうのは、大阪朝日なもんだから、報道班員になるわけですよ、当然。

僕が情報班専属になったのは、東大の助教授という職業を調べたのでしょうね。だけど、特別扱いされたわけではなく、一緒に肥えたごを担いだりなんかしていました。

## (二) 八月六日朝、ピカドン!

丸山 酒井中尉といえば、酒井中尉に率いられて、報道班員二人と二日後に外出して、被爆中心地を一日中歩き回った。わたしは、相当放射能を浴びているんです。彼も、恐らく、そうね。表通りも大手町の方から泉邸<sup>5</sup>の方を歩き回りました。

大手町(当時：三丁目、現：二丁目)に毎日新聞の支局があったのです。今でも、そうですか。

—— 今は、八丁堀辺にあります。

丸山 親父が毎日にいたから、だから、日曜日の外出のときは、よく毎日の支局に行っていたのです。それから、女房が面会に来て、ここの大手町の宿屋に泊まったのですね、女房が。それで、その宿屋の所へやっぱり行ってみました。跡形もなかったですよ。門も何もないんです。

—— 何ていう宿屋ですか。

丸山 大きな宿屋ですがね。大きな宿屋ですよ。それは、確か毎日の支局長が紹介してくれたのです。とても大きいのです。兵隊だから、こっちは泊まることは……。女房が泊まって、そこへ僕が……。だから、昼間面会に来たりして。

来たのは五月ですよ。そこの宿屋に泊まったので、だから、(被爆後に)外出したときに、その宿屋がどうなっているかと思って行ってみたら……。そこにいた女中頭のおばあさんみたいのが親切にしてくれましたよ。そして、跡形もないので、もちろん、あのおばあさんなんか吹っ飛ばしちゃってるでしょうね。

この次は、八月の初めに来るということになっていたのですね。東京の空襲があって、重病の母の介護もあり来られなかったのです、女房は。それで、運が強かったと言っていますね。

(被爆) 当日の話になりますが、大体、毎日八時に朝礼で、点呼と朝礼があるんです。八時に集合がかかるわけです。司令部の塔の前に全員が、海の方へ向いて、集合するのです。

—— 塔を背にする隊列ですか。

丸山 そうです。点呼が終わってから、今度は各班ごとに分かれる。情報班も報道班も一緒になり、コの字型に整列し直して、参謀の訓話を聞くわけです、毎朝。私たちの部屋の隣が参謀の部屋なのです。その参謀は少佐ですが、参謀の訓話を聞いていたときなんです。参謀は、塔を背にして海の方を見ていたのですね。

私たちは、塔の方を向いてコの字型に整列しています。私は、ちょうど塔に向いていました。

訓話を聞いていたところ、突然目の前が、目がくらむほどの閃光がしました。閃光がしたと同時に、私がおぼえているのは、二間ぐらい先に立っている参謀の軍帽がプーンと飛びました、上へ。ピューと飛びましたね。それで、ハッと思った途端に、もう整列していた兵隊は、算を乱して走り出していたのです。



私は、非常に反応が遅いので、何のことか分からない。恐らく、一番遅れて、門の所へ行っただけです。そういう風に話すと、分析的になりますけれども、すべて瞬間の出来事です。

私が、おぼえているのは、要するに、ピカピカッと目がくらむような、文字通りピカピカですね。近い所に雷が落ちるときに、目の前を、こう電光が横切りますね。あれの、猛烈な奴ですね。横に、こうピカピカッと来たんです。オヤッと思ったら、参謀の帽子が斜め上にシューと飛びました。

ちょっとの間に、さっと隊列が崩れたままで動いています。きっと他の連中は、実戦の経験があるんでしょう。パッパッと反応したのです。近くに爆弾が落ちたと、思ったのでしょね。僕は、非常にまごまごしていて、非常に遅れて近くの壕に滑り込んだのですけれども、無我夢中で、大きな音が聞こえたような気もするし、何か背中に圧力を感じたような記憶があるのですが、熱いという感じはおぼえていないんです。

今でも不思議なんですけど、壕からはい出したら、短剣の革がぼろぼろで、半分以上切れているんです。革というのは、丈夫なもんですからね。パーッと飛び込んだときに、変な姿勢になっちゃって切れたものなのか、それにしても革ですから、自分の力で切れるわけがないですよ。

ピカドンとは、本当によく言ったものですね。誰が言い始めたのかな。あの直後、僕らはピカドン、ピカドンと言いました。

—— 八月六日、その日にですか。

丸山 その日じゃなかったですね。外出したころには、もう。八日にはピカドン、ピカドンと言っていました。

—— 言い得て妙ですね。

丸山 確かに、言い得て妙です。ピカッと来たら、参謀の帽子がピューンと飛んだのが不思議なんですけどね。そんなに速く爆風が来たのか。そしたら、兵隊はもう算を乱しました。そのときは、全然そういう気はしませんからね。後から考えて、僕たち、よく助かったという気がして…。

長崎はちょっと外れたんですよ、あれの予定地点と。ここだって予定地点から、ちょっと外れりゃー、もう、ちょっと早くボタンを押したら、

途端にずっこけたわけですからね。(笑い)

僕の戦友、たくさん飛行機を見た人がいましたね。それで、ズーツと「ああ落下傘、落下傘」と、降りてくるのを見ていた。きっと参謀の講話を聞かないで、見ていたんじゃないですか。僕は、見ていませんでした。警戒警報ですから。一機の場合は、空襲警報なんか出ませんからね。

毎日のように空襲警報が鳴ってて、全部広島を通り過ぎて行くんですよ。不思議だな。どうしてかなあ。岡山やってる。呉をやったりするのに、何で広島、飛ばすのか。ここは、スパイの根拠地なんじゃないかと言われていたんですけど。だから温存しとくんじゃないか、と言われて。

軍艦から来るグラマンには、大分われわれもやられて、机の下に潜り込んだりしましたけど。B29は、必ず全部過ぎて行って、呉へ落とす。どうして、広島に落とさないんだらうと思ったんですね。ああいうことにならうとは。確かに、当時、もう手を上げることは、知ってたらうしな、向こうは。

### (三) 二十年後八月十五日、初めて語った八月六日

—— 「よく助かった」という話は、四年前の(一九六五年)八月十五日記念国民集会でなさいましたね。

丸山　そうです。九段会館のときに、そういうことを言ったんですけど。あれはあっち(司会)から、指名してきたわけですからね。あれが、ほとんど初めてです。原爆体験を公に話したのは。ですから、随分、あれですよ。まあ、友達やなんかでも、君が原爆に遭ったのかって、長く付き合っている人でもびっくりしたのが、多いですね。もちろん、非常に近い人は、知っていましたけれども。

何か、あまり語りたくない。それが、いっぺん話してしまうと、こういう風にね。おかしなもんでね。割合気軽に。それから、後は気軽にいろいろな人に話すようになりましたけどもね。

アメリカへ行って、原爆に遭った話をする、途端にみんな真剣になり

ますよね。寄って来ますよ。どうだ、どうだ、というので。こればかりはね、アメリカ人共通のあれですね。相当右翼的な人でも、原爆の話をする、イチコロですね。うーん、イチコロです。

原爆について、日本がどんなに強い主張をしても、日本人が、われわれがどんなことを言っても反駁しませんね。かなりやってみましたけれども。日本人が、そう発言するのは、もっともだということは共通の認識ですね。だから、その点については、まだ自己主張が足りないのでしょうか。

—— ジュネーブで、朝海（浩一朗）大使が、日本は唯一の被爆国だ、と発言された、というので問題視されていますが……。

丸山 当たり前ですよ。それを泣き言だ、というのはね。あるいは、過去のことをいつまでも言うのはおかしいと言うことこそ、おかしい。むしろ、発言するのは義務じゃないですか。

—— 海外で、被爆体験を話されるのは、どういった場ですか。

丸山 大体学者の集まりです。ええ、やっぱり「お前、戦争中、どこにいた」って話になりますよ。「私は広島にいた」と言うと、向こうがびっくりして「じゃあ、原爆に遭ったのか。よく生きていたな」って言いますよ。

—— 先生が被爆なさった、というのは海外での方が知られているのではありませんか。著書「現代政治の思想と行動」英語版(Oxford University Press, 1963)の著者紹介で取り上げていますし。

丸山 カバー見たら、みんな書いてあるもんだから。カバーにまで書かれるとは、思わなかった。僕がだべったのは、出版部長ですよ。やっぱり、ハツと思うのでしょうか、向こうの人は。部長が書くわけですね。それも、数行の紹介の中に、僕が被爆者だ、ということを書いてあるので、僕の方がびっくりしちゃってね、本が出てから。(笑い)

#### (四) 八月六日午前八時十五分後、キノコ雲の下は修羅場

—— 話を戻して、ピカッと来た後は、どうなったのでしょうか。

丸山 少したって、壕から、そろそろ顔中泥だらけになってはい上がってみた

のです。すると、あっちこっちははい出してくるわけです。

そこで、初めて、きのご雲を見たわけですね。ちょうど司令塔の真後ろから上がっているような。司令塔の斜め南にいたんですよ、僕はね。だから司令塔のすぐ真後ろに、立ちのぼっているように見えたのです。だから、「何だ、何だ、あの辺にガスタンクがあったかな」と、そういう感じなのです。そのガスタンクが爆発した、と。ものすごく巨大ですから、話にならないほど巨大な、それがゆっくりゆっくり、ちょうど立ちのぼっているわけですね。

そして、上へ行っては、スウーッと横に開いていくのです。横に開く、きのご雲のつけ根のところが、プラチナの白銀色に輝いていましたね。悪魔の光という感じですね。雲は、ほとんど黒っぽい。

それと同時に驚いたのは、司令部の建物の窓という窓が閉まっていたわけですけれども、それがピーンと全部開いちゃって、そして、ガラスは、もう一つもない。司令塔は、コンクリートとコンクリートの建物の間を二階建ての木造でつないであるわけです。それがマッチ箱をひしゃげたみたいになっているのです。それから、瓦が波を打ったようにずれているのですね。

もう、そのとき、食堂の炊事のおばさんが、顔を血だらけにして、担架で運ばれていました。

それで、非常召集がすぐかかって、部隊編成を新しくして、一時解散し、部屋に戻ってみた。再度仰天したわけですね。自分の部屋で。第一入り口のドアが、蝶番が外れまして、中に吹き倒れているわけです、部屋の中に。ひっくり返っている机もありました。書類は、全部部屋中に散乱していました。ガラスの破片が、部屋中に散らばっているのですね。

部屋の中に毎日、将校と兵隊一人ずつ、点呼に出ない留守番がいるわけです。F中佐が留守番でした。名前を出すと、あれだから、F中佐にしておいて下さい。中佐だけど、陸大を出ていないので、参謀になれないわけですね。隣の部屋は参謀部で、そこにいるのは少佐なんですけれども、参謀なんです。だから、私らの部屋にいるわけですよ。

僕が部屋に入ったときには、目だけ出して顔中包帯をしていました。

「F中佐、どうされましたか」と聞くと「うーん、日本も、早くいい爆弾をつくるんだなあ」と、それだけ言いました。

—— 新しい爆弾だ、ということは分かっていたのでしょうか。

丸山 異常な爆弾だ、ということは分かったですね。原子爆弾ということは分かりませんでした。F中佐は「日本も強力な爆弾をつくるんだ」と言いました。

部屋の中でびっくりして、また元の外の所に出たわけです。そのころから、もう市民が流れ込んできました。十五分後ぐらいじゃあないですか。宇品の方から逃げて来たんですね。三々五々入って来ました。その市民の姿を見て、またまた仰天したわけです。

着物はぼろぼろ。女の人はパーマがめちゃくちゃになって、頭にガラスの破片がささっているものですから、血が垂れているのですね、顔にね。お岩ですよ。

夏ですし、着物がやぶれていますから、女の人は毛布に体を隠して、放心したような格好で、ヨロヨロヨロ、ヨロヨロヨロと三々五々入って来ました。塔の前辺りで、パタッと倒れたのです。あとからあとから入って来て、広場はいっぱいになっちゃったのです。海辺までずっと広場なんですけれども、ここがいっぱいになったのです、見る間に。(間)

それで、真夏でしょう。背中が皮が剥けているのに、上から太陽がさんさんと照りつける。うーん、うーんと唸っているのは、セミのね、セミの声といっちゃ悪いのですけれども、異様な声ですよ。

それで、薬とか何とか言って大騒ぎしたのはおぼえています。何しろ火傷の薬なんていうのは、何人分もないのですからね。呉の海軍の飛行機で薬を落としてもらったり。

—— それはいつごろですか。

丸山 それはおぼえていません。「呉に連絡とったろうな」なんて上の方でやっていましたよ。それでもって、その日一日、何をしたのか全く記憶ないですね。面白いものです。僕は、その後、あの一週間を思い出そうとしたら、

六日一日何をしていたのかというのは、全くおぼえてないのです。悲惨な、広場がいっぱい埋まった光景を見たというのが、最後の記憶です。記憶喪失になっちゃったんですね。

—— 一日中、船舶司令部の中でしたか。市中へ出られませんでしたか。

丸山 もちろん、船舶司令部の連中は、一步も外へは出られない。ただおぼえているのは、夜になって、広島市内中の火で真っ赤に。ちょうど東京の大空襲のように、あるいは関東大震災のを思い出しましたけれどもね。その日は、そのまま過ぎたのです。

#### (五) 八月七日、丸山一等兵 米大統領「原爆投下」放送傍受

—— 次の日、八月七日からは、どうなりましたか。

丸山 兵隊に総動員がかかって、死体片付け、市内の清掃。あそこ（広島市）には第二総軍<sup>6)</sup>と第五師団<sup>7)</sup>、それから船舶司令部と、三つあったわけですから。時間的に早く、その七日です。第二総軍参謀長指示によって、これからは船舶司令部が広島市の治安維持の責めに任ずる、と言われたのをおぼえていますよ。

救護及び死体収容のため、兵隊は全部出動しろ、というあれが下ったわけです。本来なら僕は、これに行くはずなんですけれども、情報班長が「お前は留守で残っている」と。それで、一人留守になっちゃったのです。そのとき出ていたら、もっと悲惨な光景を見ていたわけなんですけれども、まさに火が収まった直後、翌日の朝ですから。

その日一日、兵隊が、生々しい死体を片付け、破壊の後片付けをやったところは全く知らないのです。僕が出たときには、少なくとも通りはきれいに清掃されておりました。

—— それは、何日ですか。

丸山 ええっと。通り、大通り、つまり電車通りはきれいに清掃されておりました。

—— 迅速だったんですね。

丸山 迅速だったです。帰ってきた兵隊の話…あの兵隊の中からも、相当放射能に当たって発病した人いるんじゃないでしょうか。直後ですから。話を聞いたところでは、救護順序としては、将官を第一にする。それから、市民。兵隊が最後なんです。兵隊は、もう絶対の被爆者、実にみじめだったでしょう。ほとんど放置されていた。すぐにはやれん。あとになるのですから。

—— 留守の司令部は、どういう状況ですか。

丸山 私は、短波をいじっていたわけですよ。これは普通兵隊は情報班でも聞けないのです。将校でないといけないのです。ただ、短波を専門に聞く特別な兵隊がいて、その人はアメリカで生まれた人だ、と言っていました。だけど、みんな出ちゃったものですから、私は、短波をいじっておったのです。

それは全く偶然なんです。短波をいじったら、トルーマンの放送が入ってきたんです。それは何時ごろだかおぼえていないのですが、八月七日の。ガラーンとして誰もいない、出動して……。ガアガアって、雑音がひどいですから、実に聞き取り難くかったですけれども、とにかくプレジデント・トルーマンの放送がある、と。トルーマンの声が入ってきて「歴史上最初の原子爆弾を投下した」ということで、これがこれか、と。まあ、名前だけは聞いていたけれども、僕は、何も実態は知らないんですよ。

その後、(トルーマンは)原子爆弾の製造・実験の由来を話しました。ヒアリングが不十分でよくわかりませんでしたけれども、ドイツで開発されたという由来ですね。それをずっと話してました。

僕は、とりあえず、爆弾は原子爆弾だという放送があったことをメモにすぐ書いて、参謀室に持っていったのをおぼえています。中央では、もう聞いていたでしょうけれども、恐らく広島では一番早い方だったのではないのでしょうか。

—— たまたま一昨日の読売新聞(六九年七月三十一日、東京版)に、第二総軍がその原爆投下のトルーマン声明の放送を午前八時半に傍受して情報として流した、という新事実が載っていました。

丸山 それは知らなかった。それはね、朝から何度もやったんでしょうね。僕は、何時ころ聞いたのかおぼえていないのですが…。

—— 参謀は、初めて知ったのでしょうか。

丸山 そこにいた参謀は、一人しかいませんでしたけれどもね。その参謀にあげたら、「そうかな」って言っていましたけれども、知らなかったですね。ピンとこないのですね。

—— 仁科先生<sup>9)</sup>が、広島入りされたのはいつでしたか。

丸山 仁科さんは、すぐ飛んで来たようにおぼえているのですがね。飛行機ですぐ飛んで来たと思います。

—— 八日ではありませんか。

丸山 八日でしょう。そうなんです。だから、仁科さんが司令部に来て、司令官の佐伯中将と二人づれで、私は廊下で会ってパッと敬礼したのをおぼえています。そして、仁科さんは、現地を視察して、原子爆弾だということを、さらに確認して、同時に中心部の一定の範囲に、非常に狭い範囲だと、私は記憶していますけれども、縄をはって、その中で研究し…

——それは、仁科先生の指示ですか。

丸山 指示でやられたらしいです。そして立入禁止で、私どもに伝わった。どういう風に言われたか、何しろ上の方でやられているのですからね。私どもに伝わって来た話では、中心部には草木一本生えない、と。あそこには（今では）生えているのですが、永久に生えないだろうということを、仁科さんが言ったという風に伝わって来た。そう言ったかどうか知りませんが。

とにかく縄をはって、立入禁止だったのです。今から思えば、さすがに仁科さんですけれども、本当に縄をはったのです。放射能のことを意識されたのだと思います。爆心地の何十メートルか何百平方の所だと思うのです。縄をはるぐらいですから。

仁科さんが来られたのは、八日ですか。そうしますと、九日ですね、私が市内を歩いたのは、仁科さんが縄をはっていたわけだから。その日、一日中歩いたのを記憶していますから、九日でしょう。



## 六) 八月九日、丸山一等兵ら被災地巡視

—— どの辺りを歩かれました。

丸山 報道班長の酒井中尉が「丸山、見に行こう」って。将校ですから自由ですね。われわれは勝手に出られないけど。将校にくっついて行った。それで報道班と。情報班は私だけで。別に、それは命令が出たのではなくて、酒井中尉が、まあ中心部に行ってみよう、と。それで、写真を撮る人と一緒に出ましたね。

もちろん歩いて行くわけです。道々凄まじい光景を見たわけですね。しかしこういう風に(写真3)（現場写真を提示）きれいになっているでしょう。これは兵隊が掃除したんですね。実際は、こういう所は散乱しているわけでしょう。電車が吹き飛ばされちゃったのです。これは軌道でしょう。

—— これは、どこでしょう。

丸山 撮った所はおぼえてないのです。写真を撮る人<sup>9)</sup>、離れていたものですからね。こうやって構えているでしょ。一々僕ら、付き合っていられないから、先に行ったわけです。

—— この写真は、どういう風に使われたのですか。

丸山 全然使っていないんです。酒井中尉から「これやる」と言われて、もらったんですけど。参謀部の報道班として撮った写真ですから、恐らく酒井中尉の所には、もっとあるんじゃないかと思うんですね。一応一組、僕も一緒に行ったから、くれたんだろうと思うんですけどね。しまっておいたんですけど、ちょっと嫌だから、あまり人には言わなかったんです。

—— よく撮れていますね。

丸山 一望千里ですから。土地の方角がつかめない。(写真4)これ似島ですから。これは比治山。こんな近い所に見えるんだな。

比治山に食糧事務所がありました。兵隊ですから、外出したときにちょっとでも寄る所があると、救いでしょう。農林省の友達に食糧事務所長を紹介してもらって、食糧事務所によく行きましたよ。確か食糧事務所長は渡辺さんとかいったかな。いい人でしたよ。

食糧事務所を紹介してくれたのは、亀田（喜美治）という農林省にいる親友なんですけども、彼が僕の親父の所に下宿していたんですね。特に、おふくろが病気で寝ていたもんですから、人手がいるんです。友達がよくやってくれたんです。

（原爆投下直後）親父が「真男は、もうだめだ、だめだ」と言ったら、亀田がコンパスで、ここ（爆心地）から、ここ（宇品）の距離を測っててね、「これ大丈夫だ」とか何とか言ったらしいんですがね。「要するに、ぎりぎりの限界だけど、多分大丈夫」と。

翌々日かな。アメリカ空軍が偵察に来たんですよ。その結果を、放送しましたね。それが「宇品近辺を除き、広島市は全滅した」——こう放送したんです。だから、僕らは、次は間違いないんじゃないか。いよいよやられるんじゃないか、と思って。

—— この写真は、どこですか。

丸山 何しろ、こういう所がわからないですよ。今は忘れちゃったけど、外出の度ごとに出ていたでしょ。広島のほとんど主な目抜き通りは知っていたんです。もう全然わからないですよ。姿が絶対変わっているでしょう。原爆ドームみたいのは別として。

これ、どこか書いときゃあ、よかったと思ってね、僕は。

—— ご案内しますから、広島へ行って見て下さい。

丸山 （広島訪問は）何とも言えない嫌な感じもして。怖いとか。いろんな何とも言えない感じです。嫌な感じですね。

—— これ、福屋です。隣に、ちょっと見えるのはうちの社（中国新聞社）です。

丸山 そうすると、これ八丁堀筋ですね。<sup>〔写真5〕</sup> 当時は、それぐらいしか大きい建物はなかったんですね。目立ったんですよ。福屋でしたかな。デパートは。あとは、目抜き通りの商家でも、古い木造の家が多かったですよ。何といても、古い城下町ですからね。コンクリートよりも木造の家が多かったですね。

<sup>〔写真6〕</sup>  
これは、教会の跡で。

—— 流川教会です。

丸山 この辺をずっと歩いたですよ。それから、泉邸ですね。お城の回りも歩きました。これは、二部隊（歩兵第十一連隊の通称）ですかね。五師団ですか。だけど、さすがにこういうのバックにして記念撮影する気にはなれなかったんだな。大手町まで、くたくたになりましたけどもね、歩きましたよ。

至る所にありましたよ、<sup>〔写真7〕</sup>テントをはってね。そこで、火傷の薬を塗ってるんですね。ゴロゴロ、ゴロゴロしていましたよ。

しかし、死体の方は、きれいに並べてあるのですね。一列に、両側にずっと死体が。

—— その処置は、どこがとったのですか。

丸山 兵隊が、前の日に外出して。

—— 船舶司令部の兵隊ですか。

丸山 ええ、ほとんどが暁部隊じゃないでしょうか。

—— 五師団の将兵は兵舎が、ここ（地図で広島城周辺）ですから、損害が大きい。宇品の船舶司令部は、生き残ったわけですか。

丸山 それで、ほとんど（作業に当たったのは）暁部隊じゃないでしょうか。

暁部隊でもね、例えば、使役に行っている人があるのですよね。そういう人は、やっぱり即死しました。けがをした人は、かなりいますね。

—— 軍隊内部の被害状況は、よく分かっておりませんね。

丸山 そうでしょう、そうでしょう。もう悲惨でした。二十五万<sup>10)</sup>というのは、兵隊入れたら、確実になるんですよ。恐らく七万五千とか何とかいうのは、あれは、もうめちゃくちゃです。僕は見た感じだけでも、そんなもんじゃないんです。あれ、少なくとも兵隊入れていないんですね。兵隊は広島市居留者じゃないんですから。兵隊もすごく多かったですから。

—— 被爆時の人口構成が、ちゃんとつかめていないんですから、特に、軍関係者は国勢調査の付帯調査でもやらないと、つかみようがありません。

丸山 そういうの、本当にやれば、わかると思うんですがね。国勢調査のときに。死んだ人、けがをした人というと、橋の上で死んだり、けがをした人

は、かなりいますね。例えば、この「宇品橋」で（写真提示）…

— これ、相生橋<sup>11)</sup>なんです。

丸山 そうですか。相生橋ですか。「宇品橋」でも、僕が見たのは欄干が、こうなっていましたね（欄干が倒れた写真提示<sup>[写真8]</sup>）。聞いた話ですけれども、「宇品橋」の上に立っていた人は、即死したそうです。爆風というのは、川をパーッと一瞬に伝わってくるのですよ。何も障害物がないですからね。宇品は（爆心地から）かなり遠いわけですけれども、橋の上を歩いていた人は即死したらしいのです。

— それは御幸橋<sup>12)</sup>ではないでしょうか。

丸山 そうそう、御幸橋です。まあ、やられるのは三つですね。熱風、放射能、光線です。

#### (七) 八月九日、毎日新聞記者に託して父へ伝言

— 先生の場合は……

丸山 あれに、完全に汚染されて……。それは、もう一日、朝から晩まで歩きましたからね。晩までというか、多分五時ごろまでに帰ってこなければいけなかったからですが、少なくとも夕方まで歩きましたよ。

それで、私は必死になって、一つには、毎日の記者を探していたのです。というのはね、うちに連絡するのに、私は無事だということを、とにかくうちに伝えようと思って、そして、やっと毎日新聞の腕章を巻いた若い記者に会えました。

— どこですか。

丸山 確かにデパートのある、あの通りですね。八丁堀、あの辺でしたね。人がごった返していますからね。そこでつかまえたものですから、急いで、私、「毎日の方ですか」「そうです」「すみません。私は丸山幹治の息子ですけれども、ご伝言いただけますか」と言ったら「いいですよ」ということです。

第一に、私は無事だということ。

それから、そのときには、すでに次の原爆投下予定地を向こうが放送してたのですね。数ヵ所ありましたが、その中に十何日かに東京が入っていたのです。十二日か十三日が東京だ、となっていたのですね。私は、放送で聞いて知っていたものですから、原爆の自分の経験を記して、原爆が落ちるかもしれないから、次のような処置をとってくれ、と。

絶対に体を露出してはいけない。暑くても、シャツは袖口まであるものを着て、外出しないように。

もう一つは、爆発したと感じたら、とにかく大きなテーブルとかベッドの下に潜り込むのが一番いい、と。

—— 被爆体験から得た対策ですね。

丸山 経験知なんですね。みんな教えられたわけではなくて、いろいろな人の話を瞬間に聞くわけですね。そのわずか二日の間にですよ。実際、それは合っているのですね。面白いのですが、私は、別に本で読んだ知識でなくて、人の話を聞いたわけで、だから、原爆を投下される恐れがあるから、こういうことに注意しろと、東京の家族に伝えようと、記者に託したのです。

とにかく、私は無事だ、ということだけは、東京の親父に通じたのです。あの方には、どうも通じなかったようです。あの紙切れを、どこかに無くしたんじゃないでしょうか。

—— お父さんは、東京本社ですか。

丸山 東京在勤で、「余録」を書いていたんです。

—— ひどい状況で、それだけの手が打てるのは、さすがですね。しかもチャンネルがあるので。普通の人だったら、むずかしいです。毎日の記者の所在、わかりますか。お会いになれば、当時の状況が、もっと詳しく分かるでしょう。

丸山 分からないのですがね。それは、もう本当に若い人なんですけれどもね。親父は親父で……。そのとき、私とだけですからね。

もう一つ印象に残っているのは、大手町の宿屋が跡形もないこと。毎日の支局の、あれもないですね。あの辺は割合おぼえているのは、案外よく行っていたからね。町並み自身も、変わったのでしょね。

— その後、広島へ行かれたことはございませんか。

丸山 ええ、ですからね。そこが、その……行く気がしないのですね。

そして、もう一つ。帰り際に、宇品の普通の民家の辺を少し歩いてみたらひどかったですね。ええ、もう、民家は崩れ落ちておりますし、それから、「忌中」というはり紙のある家がたんとありましてね。忌中、忌中、忌中って。

その当時、私が現地で聞いていたのは、二十五万死んだということでしたね。それが、そんなに僕には不自然な感じが全然しないのです。

#### (八) 二十四年後に語る原爆体験

— 話を戻しまして、先生は広島にいつまでいらっしゃいましたか。

丸山 九月の中旬でしたね、確か。中旬過ぎと言ったらいいでしょう。その後何しろ、むちゃくちゃのように、ソ連参戦、それから八月十五日ですね。それから後は、武器の引き渡しとか、続々大事件が続いたわけでしょう。それに忙殺されたわけですね。

ですから、私、どうして原爆の意味というものを、もっと考えなかったことは懺悔ですけれどもね。いろいろな原因があるのでしょうけれども、そのうちの一つは、やはり、その後に、原爆にひき続いて、日本の降伏、アメリカ軍の上陸、日本自身がどうなるかわからないという、そういう事態が踵を接して、輻輳してきましたね。そちらの方に注意が奪われちゃったのですね。

例えば、原爆、そのことは私自身のことなので……、それとも、私の八月十五日は、やっぱり戦争が終わって、本当に救われたというか、私は当然（アメリカ軍が）上陸してくると思っていましたから、徹底抗戦するものと思っていましたから、救われたという感じはしました。

その後、三日ばかり後に電報が来ました。「ハハシス ソウギバンタンスンダ チチ」という電報が来たんですがね（命日は15日）。全部吹っ飛んじゃいましてね、その喜びが。戦争が終わったという喜びが。東京に帰っても

母に会えないのだという、死に別れちゃったわけですからね。

そういうショックでもって、原爆それ自身のことを、私に考えさせなかったということがあるんじゃないかと、今から（すれば）思うのです。

それと、人間というのは、悲惨とか、むごたらしい光景というのに無限に深い不感症になる。本当に怖いという気がします。すぐ慣れてしまう。

私も子供（九歳）のときに、関東大震災に遭い、死人も見ました。広島での片付けられた後であるとはいえ、あのどうも救え切れない死体。船舶司令部前の広場に横たわった何百という人の悲惨な唸り声が、今でも耳に聞こえるようですけれどもね。

にもかかわらず、さっきの考えは、念頭にないのか、あるいは意識の下に、それを無理に追い落とそうとしたのか、それは自分でも分かりませんが、それでも、「思想の科学」でも言ったようにね。本当に原爆ということの意味を考えなくなるということは、戦争後に、あれだけ「戦争」については論じたのすけれども、「原爆」ということの持つ重たさというものを論じませんでした。

—— 今は、どのようにお考えですか。被爆体験が、思想形成に意味あるものになっていますか。

丸山 こればかりは、もう無理に意味をでっちあげてもしょうがないことで、やっぱり自分の中にずーっと、こう……発酵させていく。たまっていくものを発酵させる以外に、本当のものは出てきませんからね。もう少し記憶を、その当時の人、戦友なんかと会って、話し合えたら「ああ、そうだったな、そうだったな」ということで、もっと思い出すこともあると思うのですけれどもね。

—— そういった機会はおありですか。

丸山 やはり放射能の問題。そういうことを考えるようになったのは、放射能だって、ビキニの問題<sup>13)</sup>以後。それは、実際自分でも気がつきませんでした。現に、目の前でどんどん毛が抜けていく人を見えていますからね。われわれ兵隊も冗談に、朝起きると、髪を引っぱって、大丈夫、大丈夫と言っていましたからね。その程度の知識は、経験的な観察から得ていたのです。

原爆症というのは不思議なものだということも、幼稚ながら、実際の観察に基づいて分かっていましたね。というのは、背中がペロッとはげたような人は案外生きていて、そして、腕に小さなダンゴぐらいの火傷をしていた人が三週間ぐらいで死んだりした。そうすると、全く予測つかない。非常にひどい火傷を負った人が意外に生きてて、ほとんど外から見たら、小さな火傷に過ぎないような傷を負っていた人が、僕が復員しないうちに死んだりしました。しかし、そういうことについての知識は、ずっと後になって知りました。

—— まだまだ、広島については、分からないことが多い……。

丸山 わたしは、広島にしても、長崎にしても、これまで語られたことというのは、実際に起こったことの何千分の一、何十万分の一ほどだ、と思ってね。何十万人の人が、同時に、それぞれの場所で、それぞれの体験をしたわけですけどね。それを一人でも多くの人間、ごく些細な路傍の石の体験でも合成していかないと、まだまだほんとの断片に過ぎないんじゃないか、今まで語られていることは、という感じがします。

ちょっと感想を(このインタビューのために整理してみることを)、きのうやったんだけど、僕は、至近距離からの傍観者に過ぎないんですけど、ほんとは路傍の石に過ぎないんだけど、そういう意味で、お話ししたい気になったんですけどね。

戦争の惨禍の単なる一ページではないんですね。もし、戦争の惨禍の単なる一ページだとすれば、まだ今日でも新たに原爆症の患者が生まれて、また長期の患者とか、あるいは二世の被爆者が今日でも白血病で死んでいるという、現実ですね。戦争は二十四年前ですけどね(…その「現実」は今も続いている)。

東京なんかだったら、もう全く過去の戦争の惨禍なんていうでしょう。それが毎日日々起こっているわけでしょう。毎日日々原爆は落っこってる。

だから、大変な連想ですけど、「神皇正統記<sup>14)</sup>」に「天地の始は今日を始とするの理なり<sup>15)</sup>」という有名な言葉があるんですね。それをもじって言いますと、「広島は今日を始とするの理なり」。広島の二十何年前に、ある



日、起こった出来事ではなくて、広島に限らず毎日日々新しく起きている。新しくわれわれに向かって突きつけられている問題なんです。

—— その問題、広島の意味を聞かせて下さい。

丸山 いやいや、(笑い)そううまく整理されていないですよ。つまり、戦争の惨禍の一ページではないということですよ、二十四年前の。単なる戦争の惨禍の一ページということだったら、今日に至っても新たに原爆症患者が、なお生まれつつあるということ、また長期患者あるいは二世の被爆者が、今日でも白血病で死んでいるという現実を、一体、どう説明するか。それは戦争のアトピーというか、あまりに生々しい現実が、いわば、毎日原爆が落ちているんじゃないか。だから、広島は毎日起こりつつある現実で、毎日日々新しくわれわれに問題を突きつけている、と。

単なる体験なんかじゃないと思います。ほかにもないでしょ。こういう風にまだ毎日死んでいる人がいる。毎日といっても極端な表現ですけど、新たに原爆病が発生している。

僕だって分かんないですよ。ただ、医学が発達して、それは変わっているんですけどね。多分、僕の肝臓だって分からないですよ。もちろん、直接にはくたびれちゃったということですけども、結核になったときにも、よく知っている人は「原爆が関係あるんじゃないの」なんて言います。分からないですけどね。白血球なんかは、今でも少ないです。

—— 被爆者手帳をお持ちですか。先生の場合は、特別被爆者健康手帳が受けられます。

丸山 いや、いや。被爆者手帳交付の申請をしていないんです。先ほど言いましたように、私は広島で生活していた人間というよりも、至近距離にいた傍観者なんですからね。

(九) 八月十五日→十六日、丸山一等兵 先生に変身

丸山ゆかり (入室) お続け下さい。

丸山 あの宿屋なんて言ったけな。

ゆかり えーと、吉川<sup>きつかわ</sup>、吉川旅館と言いました。

丸山 そう、吉川旅館だよ。そこに、最後、五月に来てくれたとき「これで会えないかも知れないと言ったよね。おふくろをよろしく頼む。おれが死んだら、よろしく」。きざですけど、きざじゃないんです。ほんとに、これが最後と思って、泉邸を手をつないで歩いていますよ。(笑い)

最後といえば、敗戦の八月十五日の詔勅の後の動向ね。僕は、司令部にいたから、いろんな将校の動向を知っているでしょう。すごかったです。えらい勢いで、絶対降伏しない、と言っていました。もう血走っていましたよ。将校にはみんな拳銃が配られましたね。地下に潜って抗戦する。非常に不穏な空気。

だから、宮様が専属機で飛んで来ました。呉からも飛行機が飛んで来て、ピラをまいてね。「共に断固、最後までアメリカと戦おう」というピラをまいておるんです。

こっちは、非常にうれしくてしょうがないんですけどね、戦争が終わってね。うっかりうれしそうな顔を見せようものなら、ぶった切られちゃう。ドスを提げて歩いているようなもので、みんな。

酒井中尉はインテリだけに、動向を聞かせてくれるんです。「丸山、形勢不穏だぞ。おれたちにはピストルが配られた。兵隊には、何も聞かせない。どうも不穏で、やるらしい。こんなとこで死んじゃばかばかしい」「どうしたらいいです」「じゃあ、ポツダム宣言を、みんなに宣伝して聞かせよう。それじゃあ、お前、兵隊の方をやれ。おれは将校のほうをやる」と。

それから、リストを作って、平生みんなを知っていますから「こいつらは一番強硬なグループだから、うっかりしたことを言うと、ぶった切られるから、こんな強硬なグループには、『韓信の股潜り』ということでいこう。こういう風に隠忍自重して、国力を蓄えてからアメリカに復讐する。ここのところは隠忍自重する、という風にいこう」と。

こっちの一番軟弱な兵隊の方には、ポツダム宣言の「兵隊は、みんな家へ帰って平和な産業を営ませる」という、これも読んで聞かせる、というような手筈も決めて。それ二日ばかりやりましたよ。構想は、こうだとは

秘密にね。「丸山、声が高いぞ」なんて、よく言われましたけど。

—— 宣伝効果はありましたか。

丸山 あったですね、こっちは。将校なんかは「おい、戦争反対なんていうのは、どの程度なんだ。まあ、少佐は大丈夫だろうな」なんて動揺し始めていました。

ところが、またひどくなっちゃったんですよ。いきなり、翌日、参謀に呼ばれました。(敗戦後)最初の十六日に。参謀の部屋は隣でしょ。隣だけど、ただお茶を持って行ったりなんかするだけで、兵隊なんか、まるで見向きもされませんからね。そうしたら、いきなり「丸山一等兵、谷口(太郎)参謀からだ。すぐ行け」というのです。恐る恐る参謀の部屋へ行ったら、「どうぞ、お掛け下さい」なんて……。 (笑い)

—— 一夜にして、価値観が一変しましたか。

丸山 一夜にして変わったわけですよ。「ご承知のようなことになったので、ご苦労だけど、満州事変以後の日本の政治史を、おれに講義してくれないか」と言うんですよ。「その講義については、かなり言論の自由を許す。軍閥という言葉もいい」と。「一週間講義をしてもらおう。きょうは準備のために、外出していい」と言うんですよ。

ゆかり 谷口参謀の位は、何だったわけ。

丸山 参謀少佐、情報専門の。僕は、谷口参謀が陸大のときの教官、岡村(寧次)教官と会っていたの。「ああ、自分も岡村教官に志賀高原でお会いします」と。岡村教官というのは、ものすごいレベルなんです。昭和十五年ごろ、僕と一緒になったとき、軍人でもこんなのがいるのか、と思った。口を極めて痛罵していましたよ、軍閥を。東条のことをボロクソに、そんな言われ方に驚いた。「平泉(澄。東大文学部国史教授)なんて、神がかかりの先生を陸軍は大事にしているなんて、もってのほかだ。そんなの歴史じゃない」なんて。こっちはすっかりうれしくなっちゃってね。その人に教わったの、谷口さんは。

—— 陸軍開明派なんですね。

丸山 開明派で、思い出しました。敗戦なんて、初めはおかしなもので、それ

まで、そういう気配はなかった。谷口さんに、その話をしたら「やっぱり、日本はどこかで誤っていたのかもしれない。だから、どんなことを言ってもいいから、一週間講義をしてもらいたい」と言うんです。それで、情報班長の 広中（エイイチ）中尉に「丸山一等兵に、これから一週間講義をさせる。使役免除」。僕は、助かった、と思ったんですね。それから、講義が始まったら、外に出よう出ようと思って。（笑い）

— 　　どんな講義をなさったのですか。

丸山　　こういう風に机をはさんで向かい合って。参考書何もないでしょ。結局しようがないから、自分の持っている鈴木安蔵さんの『満州事変前後』だけですよ、タネ本はね。『近代日本歴史講座』の『満州事変前後』<sup>16)</sup>という、それを一冊持っていたんですが、ちゃんと中隊長の許可を得てましてね。

講義を始めたんですけどね、その間、参謀室だからいろんな人が来ます。「はっ」と言って大尉や中尉が訪問するわけです。「だめだめ、今、丸山先生の講義中だ」なんて。向こうは、見ると、一等兵だ。びっくりしたような顔をして、鳩が豆鉄砲を食らって帰った。あれは、もう非常に軍隊生活最良の日でした。（笑い）

それが八月十六日でしょう。十五日まで、さんざんこき使っておいてね。（笑い）

#### (+) 八月十五日後、丸山一等兵 参謀に天皇制を講義

— 　　八月十五日から十六日へと日付が変わると、時代が変わったわけですね。

丸山　　全然分からなくなってしまったのでしょ、将来が。一番やっぱり天皇を心配していましたよ。陛下はどうなるって。僕も、当時は天皇制廃止論ではなかったからね、現実には、そのときは。民主主義と君主制というのは、相容れないという風に教えたのはおかしいんでと、イギリスなんかは民主主義で、しかも君主制でと。民主制というのは独裁制に対する反論で、君主制に対する反論ではない。君主制というのは、共和制に対して君主制。

いろいろな組み合わせがある。共和制で独裁制のところもあれば、君主制で民主的な国もある。

だから「ポツダム宣言は『日本は民主主義の国になれ』と言っているので、君主制は廃止しろ、とは言っていないんだ」と、そういう説明をしたら、「安心したよ」って。(笑い)

—— 将来展望についても講義されたのですか。

丸山 法学部の研究室は、非常にリベラルだったから、憲兵には随分にらまれていたけれども、ひそひそと色々な話は出来たりするけれど、この戦争の終結の見通しなんかについても、南原（繁）先生や、その他からいろいろ話を聞いていましたからね。

大体一致した意見が「恐らく、陸軍は言うことを聞かないだろう。結局、海軍にがんばってもらう以外にない。そして、陸軍を抑えてもらう以外にない。陸軍を抑えるにはどうしたらいい、ということで、宮様以外にない、と。結局、宮様内閣が出来るだろう」というのは、われわれの間で出た話、要するに。

何も僕が考えたことじゃないんだけど、広中中尉が「どうなるだろう、どうなるだろうな」と心配するから「宮様内閣が出来るんじゃないんですか」と言ったら、それから二時間ぐらいして東久邇宮内閣に大命降下があった。「偉いもんだなあ、学問は」って。何も学問ってほどじゃない。学問は大いに名声を上げちゃったんだ、偶然なことに。(笑い)

これは見通しが偶然当たったんですけれども、普通はこういったものをやったのですよ。馬場（英夫）参謀長（中将）というのは、隣の部屋の参謀長ですけど、兵隊のあれ（兵籍）を繰って、僕の東大助教授と書いてあったのを、変なのがいるなと思ったのでしょうね。青年将校が、よく兵隊の行跡調査をやる。私も陸軍の位でいうと少佐なんで。「高等官五等か。ヤバイ奴がいるな」なんて将校が言ったってと、兵隊が言っていました。

馬場参謀長からいっぺん呼び出しがかかったんです。大分前で七月の初めごろです。行ってみたら「君は、専攻何だ」と言うから「東洋政治思想史をやっています」「中国のことやっているのか」「いや、主として日本で

す」「僕は中国に興味を持っている。中国に中産階級はあるか」と、なかなか長く追究しまして。

「一つ、宿題を出すから、三日ぐらいの間に書いてみる」「何でありますか」「ソ連の対日政策についてのソ連の暴挙」というのを書いてみる」。

船舶司令部というのは、日本海輸送を担当するんですね。日本海輸送を担当していると、ソ連が参戦すると、エライことになるわけですね。そろそろアメリカの潜水艦が日本海近辺に出没してたところです。だから、ソ連の動向に非常に関心がある。盛んにソ連と米英とが仲が悪いという希望的観測をしていましたよ。

わら半紙に急いで書いたんですね。満州事変以後のソ連の対日外交を何段階かに分けて。太平洋戦争という言葉はなかったので、大東亜戦争をどうみているか。ブラウダは（四一年）十二月八日に「この戦争で日本は必ず負ける」ということを予想している。だから、基本的にはソ連の対日態度は、日ソ中立条約があるけれども、決まっている。ソ連は人民戦線の時代だけれども、少なくとも枢軸国が敗れるまでは、ソ連と米英との協調というのは、決して揺るがないということだったのです。

それじゃ、ソ連は直ちに参戦するかというと、直ちに参戦しないだろう。独ソ戦によるソ連の受けた損害というのは非常に大きくて、生産力は30%ぐらいに低下した。だから、すぐ参戦する、または極東に事を構える能力はとてもない。しかし、「しかし」と書いて「もし何らかの原因で、日本の戦力が急速に低下したと判断するならば、ソ連は大軍を満州に南下せしめるであろう」と、そこで結んだわけです。

僕は、まさか原爆のことも、一ヵ月後に敗戦が迫っているとは、夢にも思わなかった。それで、そんな看板を上げちゃったけどさ。おかしいね。

—— 参謀長の評点はいかがでしたか。

丸山（笑い）「議論概ね妥当なり」とね。僕も、にらまれないように、よほど用心して書きました。軍隊調の「何々しあり」という独特の文体でやりましたから。あれはとっておけば、よかったな。家中を探したら、あるかもしれませぬ。わら半紙ね。返してくれって言ったら、返してくれただろう

から……。

ただ、僕は、ソ連の参戦が、あんなに早いとは思わなかったから、(予測)結果は半分外れているわけです。ヤルタ協定なんて知らないから、まさか、その直後に、ソ連が参戦するとは思わないので、当分は、むしろ参戦しないだろうと、書いてあるんです。生産力が30%になったということは、記録で読んでいた。とてもとても極東のことを考える余裕がない、ということも書いてあるわけです。だから、半分しか当たらないんですね。

ただし、何らかの原因で、それは何もわからない。まだ、それは原爆ということ、もう…(間)…だもんで、日本の生産力が急速に低下したとソ連が判断したら、希望的観測はだめだということは書いてある。それは偶然に半分当たったんですね。

—— 情報があつてこそ、理論的裏づけが生きてくるわけですね。

丸山 何も、僕も学問とか何んとかというんじゃないくて、単純なことで、やっぱり国際情報をもていましたから、同盟通信の程度のサービスを。それさえ普通のことでも、また戦果が上がるという調子の大本営発表だけ書いていた。その当時の新聞の紙面というのは、そういうものですから、それだけで判断しているよりは、少しはましかな。しかし、基本的には、シャバのリベラルの考え方は、そういう考え方でした。宮様内閣でないと、収まらないだろうというのは、そうでした。

#### (出) 四五年九月、丸山元一等兵 復員

—— お話のような知られていない事実を記録しておけば、将来歴史を書くときに役に立つでしょう。

丸山 非常にささやかなエピソードにすぎないんですけど。知られていないといえば、あの船舶司令部というのは食料を持っていたんですから。

—— そんなに持っていましたか。

丸山 持っていましたね。それは敗戦後、分かったですね。僕ら、将校の手伝いして、将校の使役で運んだんですから、物を。物を運んだんで、みんな

いきりたっていたのが収まったんですよ。それは、もうほんとに浅ましかったです。兵隊に荷車で運ばせるんですから。ニクロム線から砂糖、油。砂糖なんか山ほどですよ。リンゴは腐るほどあるし。船舶ですから、自分が持っているでしょう。輸送部ですから、すごい物持っていましたね。驚いたね。  
——丸山一等兵の分け前は、いかほどで……。

丸山 砂糖やなんかは。靴を、例えば二足もらっただす。<sup>へんじょうか</sup>編上靴、それから毛布。これなんか随分助かりましたよ。毛布三枚ぐらいあったかな。

ゆかり 三枚。それは、よくおぼえています。

丸山 われわれにも配給がある。でも、リュックいっぱいだったものね。

ゆかり 背負ってくるのが大変だから。

丸山 将校は、もう運び放題。当時のLST船といったかな、上陸用の。LSTなんかで持って行った奴がいますよ、将校には。僕は、ニクロム線なんて、電気の知識がないから知らなかったです。電熱器のね。あれを山ほど持って帰った奴がいたですよ、将校で。あんな物何するんだろうと思ったら、あれは大変な物なんだね。召集将校だったな、やっぱり。職業軍人の方は、きっちり、ちゃんとしていましたよね。兵隊は、ちゃんと配給された物だけを持って帰るんですけど。

敗戦というのは、そういうことで、無政府状態です。とくに、広島は原爆になっちゃったでしょう。よけい無政府状態ですよ。

看護婦（入室） 先生が、もうこれくらいでとのことです。

## 注

- 1) 「陸軍船舶司令部」は、第二次大戦中の1942年、船舶輸送部隊を増強するため、広島市宇品港に司令部を置いて設けられた陸軍の輸送機関。司令官は、陸軍運輸部長が兼任して、原爆被爆当時は中将佐伯文郎。隷下の十三個の部隊は、分散して同市南端部や周辺の小学校舎などを兵舎としていたので、原爆による大きな被災を免れた。隷下の部隊は、被爆直後から消火活動、被災市民の救護、死体処理、幹線道路・水道・電灯線の復旧に当たった。同司令部の概要と被爆救護活動については、広島市編「広島原爆戦災史第一巻」、昭和46、217～292頁に詳しい。



- 2) 「高い司令塔」は、'39年に宇品の陸軍輸送部構内に建てられた凱旋館。本館と別館があり、本館は鉄筋コンクリート三階建て。全国から寄付を募って建てた。出征帰還軍人の歓送迎、慰安施設であったが、第二次大戦中は船舶司令部が使用。戦後、第六管区海上保安本部が使ったが、'70年に取り壊された。
- 3) 「同盟通信」は、'36年創立。第二次大戦中、日本唯一の国策通信社で '45年解散した。共同通信社と時事通信社は、同盟通信社の後身。
- 4) 「ポツダム宣言」は、'45年7月26日、ベルリン郊外ポツダムで米・英・中の三国が日本に発した戦争終結のための共同宣言。日本の降伏条件——軍国主義的指導勢力除去、戦争犯罪人の厳罰、徹底的民主化、連合軍の占領、領土の局限などを定めた。日本は無視したが、広島・長崎の原爆投下、ソ連参戦によって8月14日受諾して、第二次大戦は終結した。ソ連は、参戦後、宣言に参加した。
- 5) 「泉邸」は、広島市中区上鞆町にある縮景園の別称。広島藩主浅野長晟入国の翌1670年(元和6年)別邸の庭として作った大名庭園。中国の西湖を模して、縮景した回遊式庭園。四万平方 $\text{m}^2$ 。爆心地から約1 $\text{km}$ 。原爆で崩壊したが、復元した。国の名勝。
- 6) 「第二総軍」は、第二次大戦末期の19454月、本土決戦に備えて編成された陸軍の統帥組織。陸軍司令部を鈴鹿山系を境にして東西に二分し、第一総軍の司令部を東京、第二総軍(西方)司令部を広島市二葉の里の元騎兵隊第五連隊兵舎に置いた。総軍司令官は大將畑俊六。司令部は、爆心地から約1.6 $\text{km}$ 。原爆で焼失。中国新聞社編『広島県 大百科事典下』、1982、「第2総軍司令部」27 $\text{p}$ 、広島市編『広島原爆戦災誌第一巻』、昭和46、「在広主要部隊配置図」36 $\text{p}$ 、「昭和二十年八月六日当日在広主要部隊一覧表」38 $\text{p}$ を参照。
- 7) 「第五師団」は、広島、山口、島根(県西部)の三県を壮丁の徴募区域とする陸軍の兵制単位。師団司令部は広島城跡(広島市中区基町)に置かれた。1945年8月当時、留守師団司令部には、中国軍管区司令部が置かれた。爆心地から約800 $\text{m}$ 。原爆で焼失。中国新聞社編『広島県大百科事典下』、'82、「第5師団」18 $\text{p}$ 、広島市編『広島原爆戦災誌第一巻』、昭和46、「昭和二十年八月六日当日在広主要部隊一覧表」38 $\text{p}$ を参照。
- 8) 「仁科先生」は、芳雄(1890~1951)。物理学者。'31年理化学研究所に仁科研究室を創設して、原子核の研究をした。理化学研究所長。'45年8月8日、大本営は、大本営参謀本部長の有末精三中将を団長とする広島爆撃調査団を派遣した。仁科博士を中心とする医者、技術者ら団員30人は8日午後、DC-3型輸送機で吉島飛行場に到着。入市調査団第一号。仁科博士らは、まず焼け残った宇品の船舶司令部を訪れて、調査の手筈を整え、第一電を大本営へ打った。調査団は精力的に市内の状況、死傷者を調査し、10日には在広陸海軍調査団、別途入市した京大調査団と協議した結果、同日付けで大本営へ「原子爆弾なりと認む」という広島爆撃調査報告を電報と飛行機便で送った。広島市編『広島原爆戦災誌第一巻』、昭和46、「第二章原子爆弾の惨禍」82~85 $\text{p}$ を参照。

9) 「写真を撮る人」は、川原四儀さん(46) = 1969年当時、広島市(中区)大手町二丁目 = '69年8月5日付け、中国新聞夕刊掲載「二十四年目に語る被爆体験—東大教授丸山眞男氏(当時一等兵)の『思想と行動』」(上)に丸山さん所蔵の被爆風景写真二葉を掲載したところ、同日、中国新聞社に「撮影したのは私」(翌6日付け夕刊見出し)と名のり出た。川原さんは船舶司令部参謀部写真班員。班員は七、八人いた。8月7日から命令で被災した軍施設、臨時被災者収容所を撮影して回った。使用カメラは、ライカ、セミパール。撮影した写真は、終戦後、参謀部の命令で焼却したが、ひそかに25枚保存していた。同僚にも焼き増して、手渡した、という。'69年8月6日付け、中国新聞夕刊掲載「丸山氏所蔵の原爆記録写真『撮影したのは私』川原さん(広島)名のり出る」、広島市編「広島原爆戦災誌第五巻資料編」、昭和46、「被爆広島島の写真記録者たち」983頁参照。

10) 「二十五万」については、広島市編「広島原爆戦災誌第一巻」、昭和46、「第一編総説第二章原子爆弾の惨禍 第三節人的・物的被害」で「人的被害もまた空前のもので、死傷者おおよそ二十数万人に達したのである。ただし原子爆弾による障害は非常に長期間にわたるものであるから、一つの時点で確定することはできない」152頁としている。

また、「昭和二十年十一月三十日現在で広島県警察部がおこなった次の調査結果が、公式発表としてはもっとも信頼性の高いものとしている。死者 七八、一五〇人/重傷者 九、四二八人/軽傷者 二七、九九七人/行方不明 一三、九八三人(即死した者と推定される)/罹災者一七六、九八七人/計三〇六、五四五人」155頁という被災者数を載せている。被災者の実数は「被爆当時の、広島市の人口そのものが不明確であるから、人的被害の正確な把握は、さらに困難である」154頁。

被爆当時の人口としては「昭和二十一年八月十日に市調査課が各町内会を通じて被爆時の人口調査を行なった結果、軍関係を除いて三十一万二、二七七人であったといわれる」152頁。

丸山さんが「広島市居留者でない」とみた兵隊は「広島市が新修広島市史の編集(昭和37年)にあたり、昭和二十八年七月三十日に元広島師団の動員関係者ら一六人を集めて調べたところ、第二総軍司令部(三〇〇人)・中国軍管区司令部(五〇〇人)・広島聯隊区司令部(三〇〇人)・十一聯隊(三、〇〇〇人)・野砲隊(三、〇〇〇人)・輜重隊(一、五〇〇人)・赤穂部隊(二万人)・工兵隊(三、〇〇〇人)・陸軍病院関係(二、五〇〇人)以上計三万四、一〇〇人で、その他、被爆当時入営した一、〇〇〇人を加えても四万人を越えないと言われる」(昭和二十八年七月三十一日付朝日新聞)。

このほか字品に陸軍船舶司令部があり、この隷下諸部隊のうち、広島市内に駐屯していた将兵は約五~六、〇〇〇人(齊藤義雄談)であったといわれるから、これらを総合すると当時の広島市の常住人口は三五万人程度であろう」152頁。

さらに、昼間人口は「八月六日朝入市した郊外からの一般通勤者、および官庁・会社・

工場、あるいは建物疎開作業に出動して来た人々、推定数約二万人（新修広島市史）を加えると、昼間人口は総計三七万人程度となる。しかし、当時の昼間人口はいちじるしく増大したとも言われ、四〇万人前後であったという見方もある」153頁。

- 11) 「相生橋」は、「本川に架橋。爆心から100㍍。半壊。爆風により勾ラン柱埋込のI型钢が剪断。また橋床板の嵩上が大きく吹き上げられて移動した。西部あるいは北へ向かって、多数の人が渡って逃げた」。広島市編『広島原爆戦災誌第二巻』、昭和46、「広島市内主要橋梁の被害状況表」153頁。
- 12) 「御幸橋」は、「京橋川に架橋。爆心から2.300㍍。被爆後の存否=存。石造の勾ランが双方とも爆風によって倒れ、南側河中に転落。中央部から宇品方面へ避難しようとする罹災者で橋上は大混乱し、凄惨をきわめた」。広島市編『広島原爆戦災誌第二巻』、昭和46、「広島市内主要橋梁の被害状況表」143頁。
- 13) 「ビキニの問題」は、'45年3月1日、太平洋赤道海域のマーシャル諸島ビキニ環礁でアメリカが行なった水爆実験で、焼津市のマグロ漁船第五福竜丸（99㍍、乗組員23人）がビキニ環礁の東方約160㍍で操業中、実験による放射性降下物「死の灰」を大量に浴びたことで起こった。乗組員全員は、いわゆる原爆症にかかり入院。読売新聞は、入院を「ビキニ環礁で邦人漁夫23名原子病？」とスクープした。放射能マグロは埋められ、倒産した魚屋もあった。軽症とみられた無線長の久保山愛吉さん（40）が9月に死亡。その死は大きな衝撃となって広がり、広島・長崎の原爆体験と一体になり、原水爆禁止運動の起爆剤となった。中国新聞社編『広島県大百科事典下』、'82、「ビキニ事件」318頁。  
第五福竜丸は、その後、東京水産大学練習船「はやぶさ丸」に改造されたが、被災十二年後の'66年に廃船となり、東京湾のゴミ埋め立て地「夢の島」に放置、朽ち果てようしていた。'69年、都民から水爆被災に証人として保存しようという運動が起こり、第五福竜丸保存委員会が発足、募金活動などをした。'73年11月、第五福竜丸を永久保存するため「財団法人第五福竜丸保存平和協会」が設立した。中国新聞社編『広島県大百科事典下』、'82、「第5福竜丸保存運動」193頁。
- 14) 「『神皇正統記』は、南北朝時代の1339年（延元4年）北畠親房が、南朝の正統性を主張するために書いた神武天皇から後村上天皇に至る天皇記。丸山真男『戦中と戦後の間』（'76、みすず書房）のうち「神皇正統記に現はれたる政治観」を参照。
- 15) 「『天地の始は今日を始とする理なり』」は、『神皇正統記 岩佐正校注』、岩波文庫、'82、64頁。
- 16) 「『近代日本歴史講座』の『満州事変前後』」は、近代日本史研究会著、白楊社、昭和18。

### 三、丸山眞男の広島

#### (一) 被爆後初の広島訪問

丸山眞男さんは、七七年、被爆後三十二年ぶりに、広島を訪れた。

年譜（『丸山眞男集別巻』74頁）に「五月、広島大学平和科学研究センター第一二回研究会で『50年前後の平和問題』と題して講演。三二年ぶりの広島再訪。被爆三日後に写真撮影のために歩いたコースをたどる」とある。ゆかり夫人が同伴した。

二十五日、広島大学で講演する前に、平和記念公園を訪れた。

原爆慰霊碑に近づきながら「長い間、ここに来るのが怖かったんだな」とつぶやいた。初夏の日が映える公園の芝生には、アメリカ人の観光客がはしゃいでいた。その光景を見渡して「やはり陰鬱な所だな。ここは」と話しながら、足早に原爆資料館に入った。

丸山さん夫妻は、修学旅行の小中学生にもまれながら、館内の展示を丹念に見て回った。言葉少なかった。

被災状況を示した広島市街模型を見詰めてから口を開いた。「キノコ雲は、ついそこに見えたが、（船舶司令部から）爆心地まで四\*ちよっとあったんですね。もう少しずれていたら、蒸発してましたよ。司令部の建物（旧凱旋館）が、閃光や爆風をさえぎらなかつたら危なかった。運命は紙一重の差ですよ」。 (17頁参照)

原爆資料館を出ると、ビルに囲まれた原爆ドームを目にした。「あれが意外に小さく見えます。いや、回りに大きな建物が増えたのですね。広島も高度成長したのだ」と言った。

講演した当日、市内も見て回った。勤務していた宇品の船舶司令部跡（第六管区海上保安本部）を、まず訪ねた。ついで、比治山から市内を展望。原爆投下三日後の八月九日、巡視した大手町－相生橋－広島城－泉邸（縮景園）のコースをたどった。(28～31頁参照)

## (二) 「拝復 被爆者はヒロシマを避けます」

七七年五月二十五日、広島大学本部の会議室で、講演した。大会議室は満員。演題は「一九五〇年前後の平和問題」。

丸山さんは、広島再訪について語り始めた。「私がこの前広島に参りましたのは、一九四五年二月に暁部隊に召集を受けたときであります。それから一九四五年の九月の半ばまでおりました、復員一等兵として廃墟の広島を後にしました。ですから、ちょうど三十二年ぶりで広島に参ったのです。私は、戦後三十二年の間に北海道から九州まで各地を旅行しました。それから比較的長期にわたって海外に滞在したことも二度あります。けれども、この三十二年の間、一度も参りませんでした。

なぜ来なかったか、と言われても、私には答えがありません。自分でも分かりません。機会は、いくらでもあったにもかかわらず、なぜ広島に来なかったのか。正直なところ本当に分からないのです。

廃墟から立ち直った広島、立ち直ったどころか、日本の高度の経済成長を象徴するかのように繁栄しております広島を見ることに対する恐れ、それから「見たい」という気持ちとが、何か自分の心の中で、いつもせめぎ合っていたというほかありません。それ以上はほとんど言葉になりません。なぜ、来なかった、今日、ここに参ります前に、私は原爆ドームと原爆資料館を訪れました。(中略)

どういふものか昨年の八月三十一日に、アメリカから日本に帰って来ますと、同世代の親しい友人が相次いで世を去りました。何となく、自分が動けるうちに、もう一度広島に来なければ、いかんと思っておりました矢先に、関(寛治)教授(同研究センター長)を通しまして、広島の平和科学研究センターに気楽に来ないか、という勧誘を受けたわけであります。

そういういろんな条件が重なりまして、広島を訪れることに対する、今まで持っておりました説明のつかない一種の心理的抵抗感というものにケリをつけるように、自分の心に言い聞かせる絶好の口実ができましたという感じが致します。こうして、私は三十二年ぶりに、皆様の前に参ったわけであります」

ところが、丸山さんの広島訪問に対する「心理的抵抗感」にケリはつかなかつ

たようだ。この七七年の広島訪問から六年後のことである。広島市西区の開業医、藤高道也さんが、丸山さんに手紙で問い合わせた。広島大学での講演で広島に触れたときの逡巡、丸山さんを、そうさせるものは何だろうか。丸山さんが平和を論じながら原爆に言及しないのはなぜなのか、プレスコードと関係があるのだろうか、と。

はがきで返事があった。投函の日付は「83.7.11」。年譜（『丸山眞男集別巻』78頁）に「一九八三年（昭和五八年）六九歳 七月、ヨーロッパ各地を夫婦で旅行」とある、その直前の頃である。

拜復、ヨーロッパに出かける前なので失礼ですが簡単にお答えします。  
(プレスコードとは無関係です。ただし、私は原爆体験をすでに思想化していると思うほど不遜ではありません)

小生は「体験」をストレートに出したり、ふりまわすような日本的風土(ナルシズム!)は大きいです。原爆体験が重ければ重いほどそうです。もし私の文章からその意識的抑制を感じとっていただければ、あなたにとって縁なき衆生とおぼしめして下さい。なお、私だけでなく、被爆者はヒロシマを訪れることさえ避けます。私は六年前、勇をこして広島大学の平和研究所に被爆後はじめて訪れ、原爆と平和の話をしました。しかし被爆者ヅラをするのがいやで、今もって原爆手帖の交付も申請もしていません。

(注：傍点、サイドラインは丸山)

広島での講演の題目は「一九五〇年前後の平和問題」。朝鮮戦争が勃発した五〇年、学者を中心にした平和問題談話会の一員として、「三たび平和について」と題した声明の原案づくりに参画したときの背景などを紹介し、その当時から学びとることは多い、と述べた。

講演の内容と丸山さんの原爆体験とのかかわりについては、講演の十年前に、丸山さん自身が、「思想の科学」'67年5月号の対談「語りつぐ戦後史」（10、14頁参照）で、解説している。

「平和問題談話会で、私は、朝鮮戦争のあとで『三たび平和について』という報告の序論の部分の原案を書いたんですけど、なんとかして平和共存論の理論的基礎づけをしようとした。そのときに、原爆でもってこれまでの戦争形態がすっかり変わった、原爆の出現によって、どんな大義名分のある戦争でも、現在の戦争ってのは手段のほうが大化しちゃって、目的に逆作用する可能性が強くなった、ということをあそこで述べたわけです。けれども、それにしても一つのグローバルな『抽象的』観察なんですね、私が広島で原爆にあい、放射能も浴びたという体験とは結びつかなかったんだなあ」。

「三たび平和について」を書いた当時、意識的抑制が効いて、自己の原爆体験と核抑止論とが結びつかなかったのであろうか。

この点について、石田雄さんは、丸山さんの脳裡では原爆体験と核問題とが結びついていて、とみている。このくんだり、先にも引いたが、もう一度触れる。

「一九五〇年『三たび平和について』の中で、核兵器の出現によって『戦争が本来手段でありながら、手段としてとどまりえなくなったという現実』を指摘し、『原子力戦争は、最も現実的たらんとすれば理想的たらざるをえないという逆説的真理をおしえている』と書いた。この部分を書いたとき、丸山の脳裡をかすめたのは、四五年八月に広島でみた光景に違いない」（『丸山眞男戦中備忘録』日本図書センター、'97、169頁）。

丸山さんの脳裡をかすめたのは、はたして、何であったのか。もう一度インタビューして、確かめることは出来ない。

謝辞 丸山ゆかりさんには貴重な助言と資料を頂きました。筆者の長女、林かおりは資料収集を手伝ってくれた。友人の阿部敏夫さん（元中国新聞校閲部長）にはワープロ原稿をチェックしてもらった。広島大学平和科学研究センターの松尾雅嗣センター長は「IPSHU研究報告シリーズ」に丸山眞男先生とのインタビューの記録を載せる機会を与えて下さいました。それぞれのご支援に、お礼を申し上げます。 (林)

#### 四、講演記録『一九五〇年前後の平和問題』

以下の講演記録は、丸山眞男の手帖の会（代表川口重雄氏）と丸山ゆかり氏のご厚意により『丸山眞男手帖』第4号（1998年1月刊）より転載させていただきました。

一九七七年五月二五日、午後四時三〇分から丸山を迎えて広島大学平和科学研究センターの第一二回研究会が同大学で開かれた。

センター長（当時）・関寛治東京大学教授の紹介に続いて行われた「'50年前後の平和問題」と題する丸山の講演は二時間に及んだ。丸山が広島を訪れたのは、一九四五年二月、広島市宇品町の陸軍船舶司令部に応召、四月に参謀部情報班に転属、八月六日司令部前で点呼朝礼中に被爆、そして九月に召集解除になって復員して以来、三二年ぶりのことであった。講演の当日、丸山は被爆三日後に写真撮影をしつつ歩いた爆心地付近の道をたどった。

以下の記録は、当日の丸山のスピーチを広島大学平和科学研究センター（センター長・松尾雅嗣広島大学教授）から提供されたカセットテープをもとに復元したものである。

なお、編集部責任により原題を標題の通り改めたほか、適宜に中見出し（\*印）をつけ、[ ]で編集者の註記を加えた。また、テープの収録は丸山の了承を得ているが、公表を予定したものではない。文責はすべて編集部にある。

「丸山眞男手帖」編集部

\*

ただいま御紹介にあずかりました丸山です。私がこの前広島に参りましたのは、一九四五年二月に暁部隊に召集を受けたときであります。それから一九四五年の九月の半ばまでおまして、復員一等兵として廃墟の広島を後にしました。ですから、ちょうど三十二年ぶりで広島にまた参ったのです。

私は戦後三十二年の間に北海道から九州まで各地を旅行しました。それから比較的長期にわたって海外に滞在したことも二度あります。けれどもこの三十



二年の間、一度もここには参りませんでした。

“何故来なかったか”と言われても、私には答えようがありません。自分でも分かりません。機会はいくらでもあったにもかかわらず、何故広島に来なかったのか。正直なところ本当に分からないのです。廃墟から立ち直った広島——立ち直ったところか、日本の高度の経済成長を象徴するかのように繁栄しております広島——を見ることに対する恐れ、それから“見たい”という気持ちとが、何か自分の心の中でいつもせめぎ合っていたというより他ありません。それ以上はほとんど言葉になりません。何故三十二年間、来なかったか。今日ここに参ります前に、私は原爆ドームと原爆資料館を訪れました。

私は昭和二十六年から三十年にかけて二度ばかり非常に重い肺結核になりまして、左の肺の大部分を切除しました。肋骨を七本取りました。一九六九年から慢性肝炎という今でも医学的によく分からない病気になりまして、現在なお血液検査をしょっちゅう受けているという、そういう体です。その上、どういふものか、昨年八月三十一日にアメリカから日本に帰って来ますと、同世代の親しい友人が相次いで世を去りました。何となく、自分が動けるうちにもう一度広島に来なければいかんと思っておりました矢先に、関教授を通して、広島市の平和科学研究センターに気楽に来ないか、という勧誘を受けたわけであります。

そういういろいろな条件が重なりまして、広島を訪れることに対する、今まで持っておりました、説明のつかない一種の心理的な抵抗感というものにケリをつけるように、自分の心に言い聞かせる絶好の口実ができたという感じがいたしました。こうして私は三十二年ぶりに皆様の前に参ったわけであります。そういう機会を与えて下さいました、私のさっき申しました矛盾した気持ちにケリをつけて下さった、平和科学研究センターの皆様にもまず心からお礼を申し上げます。

しかし、さきほど御紹介で関教授が言われましたように、私も前から言っておりましたように、私は平和研究というものは一向にやっておられません。それどころか、政治学のゼネラル・セオリー＝一般理論の研究からも、また現代政治の現状分析ということからもすでに十何年遠ざかっております。私が現在

やっている仕事はそれとは非常に遠いものです。平和研究の今日の状況についてはほとんどゼロに等しい予備知識しかございません。謙遜でも何でもなく事実です。したがってすでに六十歳を越えた私にこの領域でできることと言えば、老人の思い出話に過ぎないわけです。

思い出というのは客観的な過去の記録ではありません。人間というものは大変都合のいい動物でありまして、過去というものの中からあまりにいまわしい過去、あまりに嫌な記憶というものは、いつの間にか遠くなって消えてしまう、そしてきれいな記憶が残るものであります。したがって、いくら自分で意識しなくても自己欺瞞によりまして、自分の過去ないし自分たちの過去については“きれいごと”になりやすいものです。私はそういうことを決して否定しません。そういうことをふまえた上で、若干の思い出話をお話ししようと思います。それがどこまで皆様の御参考になるかどうか……。

\*

ただそういう私の問題と離れまして、日頃私が感じておりますことは、非常に難しいというか——普通の言葉で言えば、われわれの歴史意識ということがあります。どういうことかと申しますと、日本人の歴史意識というものはいま中心主義であるということです。ということは、逆に言えば、過去というものは済んでしまったことなんです。過去を語るということは、済んでしまった、或る時間的に過ぎ去った過去のことを語る。つまりいまと関係のない過去のことを語る。思い出というものはそういうふうにして話されます。またそういうふうにして聞かれます。

いつもいまの問題、ないしいま起こっている事柄に興味集中している。もし過去が興味を呼び起こすならば、それはまったくいまに関係のない——ちょうどテレビの昔の源平時代のドラマを見ても、いまわれわれが毎日毎日当面している問題と何の関係もないこととして“ああ面白いお話だな”というようなかたちでしか、過去というものは見られない。そういう傾向があるんじゃないかと思います。これは非常に根深い問題であり、必ずしも世代の差というようなことでなく、もっとわれわれを深く規定している考え方ではないか。そのこ

とについて、立ち入ろうとは思いませんけれども、そういういま中心の考え方が強いということは、皆様がちよっとお考えになれば恐らく思い当たられるのではないかと、思います。

「古典」という言葉があります。これは恐らくクラシックということの訳語だと思いますけれど、クラシックという言葉には古いという、昔という意味はいささかありません。古典というものはわれわれにとっての範例であります。模範であります。われわれの考え方なり行動の基準となるものが古典です。昔々或るときに起こった事柄について書いたものは古典とは申しません。それはただ古い書物、古い文献です。クラシックに古という字をつけるということ自身が、要するに古いものだ、いまのわれわれがやっていることとは関係のないことである、という考えがどこかに潜んでいると思います。

つまり過去と現在とを二重写しにして見るという眼が、われわれにはいささか乏しいのではないかと。これを仮に私は“歴史的直線主義”と称する。過去、現在、未来を線で現す。線で現されますから、過ぎ去った過去は或る線のあつち側にあるわけです。未来はこっち側——反対側にあり、現在はここにある。したがって過去は、もう過ぎちゃったことであります。それでおしまい。それはそれとして過去の話として面白いかも知れない。しかしそれは少なくとも現在のこととは何のつながりもない。

ですから日本では、明治以後の歴史を見ますと、例えば、世代論による批判というのが繰り返して出てきます。あの世代は古いとか、それは古い世代を代表する考え方である、と。そういう世代論が大体、明治二十年頃から繰り返して出てくる一つのパターンです。新しい世代による古い世代の批判というかたちで、批判がいつも出てくる。徳富蘇峰が恐らくそういう批判のパターンを、明治以後においては初めて鮮明に表現した思想家です。彼の明治二十年代の初期におけるベストセラーは『将来之日本』『新日本之青年』——これは非常に象徴的です。これで一躍蘇峰は文名を挙げたんです。『新日本之青年』は簡単に言いますと“もはや天保の老人の時代は過ぎた。今からは明治の青年の時代だ”——こういうことです。天保というのは不思議に、——不思議と言うとおかしいですけど、年号の中では長い時代なんですね。昔は一世一元ではなくて（不

明) ……。

したがって天保時代に生まれた人というのは非常に多いんですけども、例えば朝野を問わず明治維新から自由民権運動にかけて活躍した人はほとんど天保生まれです。いわゆる維新の志士だけでなく、思想家にしても学者にしても大体そうです。維新革命の途中で志半ばに倒れた志士たちも、生き残って位人臣を極めた人たちも、それから福沢とか中江兆民は皆こういう世代です。

そういう世代に対して蘇峰は文久三（一八六三）年生まれです。維新のときは五歳で物心ついていない。明治二十年になって二五歳、この前後に幕藩体制の崩壊を経験しない、純粹の維新以後の中で育った世代というのが成人します。その蘇峰によって“天保の老人よ去れ”という論文が『新日本之青年』という本の中で書かれている。そこでは〇〇（不明）のような在朝とか在野とか、政府派とか政府反対派とか、そういう区別とは違った次元で線が引かれている。廟堂＝政府に在る維新の元勳も、それに反対している自由民権思想家たちも実は同じ世代なんだ。彼らの世代はもはや新しい世代に対して何ら指導力を持たない。今や新しい青年よ起て、ということをや青年の先頭に立って、当時この二十幾つの蘇峰が非常に名文で訴えたのが『新日本之青年』であります。それ以後繰り返し、そういうかたちの批判というのが提起されて来ました。

これは、さっき言いました日本の歴史意識と深くかかわっていると思います。それは、それだけを取り出しますと、どこの時代、どこの世界にもあるわけですけども、そういうパターンが非常になじみやすい、ということでもあります。そこにはもちろん、すべて排斥されるものがあるわけではありません。もちろん老人支配というのが今日日本をむしばんでいる病弊の一つであることは、皆さん御承知の通りです。政界が一番甚だしいのですが、その他の世界でもそうです。けれども他面では、さっき言いました古典という言葉に現れているように、クラシックというものを古い本であるという考え方。クラシックがいま生きていて、いま日々生きて、われわれにとっての基準になる。基準になるというのは、それにそのまま従うということとは別です。御承知のように、ロマンティズムというものは古典に対する反逆から発しているわけです。しかし、古典のないところには古典に対する反逆もまたありません。クラシズムのな

いところにはロマンティシズムもないわけです。古典がしっかりしているからこそ、それに対する反逆が出て来る。またそれなりの意味を持つ——古典との緊張において意味を持つわけです。形式がしっかりしているところに初めて形式を打破するということが意味を持つ。元来、形式の力が弱いところでは形式を打破するということは、単なるストリップ主義に過ぎなくなる。文化というのは一つの形式ですから、“面倒くさい脱いじまえ”ということになると、これはストリップになるわけです。動物になることで終わってしまうわけです。

ですから、われわれとしては、日本人を深く規定しているそういうものの考え方というものを考慮する必要があるのではないか。これが、私が敢えて自己弁護をしてまで、一九五〇年代という大変古い時代の一つの小さな集りについて話すことに、強いて理屈をつけた弁明であります。

\*

私が直接、平和問題の研究についてお話しできることと言えば、「平和問題談話会」という会合に私が参加しまして、そしていささか活動をした、ということでもあります。

「平和問題談話会」それ自身の経緯については私以上に話すのに適当な方がございますので、くだくだしくは申しません。さきほど御紹介になりました「三たび平和について」は一九五〇年の九月に発表され、そして同年十二月号の雑誌『世界』に載りました。論文と申しますか、声明と申しますか、「三たび平和について」ができるまでの経緯というものを、ごくかいつまんでまず話したいと思えます。

\*

そもそも「平和問題談話会」というのは、初めはそういう名前がついていたのではないのであります。一九四八年（昭和二十三年）の七月にユネスコが主体になりまして——日本はその当時、占領下にあつて呼びかけはなかったので——各国の社会学者に呼びかけまして、八人の社会学者が集まって「平和のために社会学者はかく訴える」を発表したのであります。ただし、その

当時ソ連はユネスコに入っていないのでソ連からは来ておりませんが、いわゆる「東」の世界からも加わりました。そして戦争と平和の問題について声明を発表した。そしてその資料がGHQを通じて『世界』の編集長をしていた吉野〔源三郎〕さんのところへ来たわけです。吉野さんはまた吉野さん独自のお考えから、日本の社会学者及び自然科学者がユネスコの「声明」を受けて、しかもそれと違った日本の知識人ないし学者として、戦争と平和の問題について、自分の専門領域を超えて一つの討議を持つ必要があるんじゃないか、というお考えがあったようです。

はじめは政治家も加えようということでありましたようで、例えば保守党の人から野坂参三さんのような共産党の人まで加えて、平和問題についての話を持とうという考え方もあったようですが、吉野さんが非公式に相談された長老の先生、例えば慶応の小泉信三先生などから、政党の人というのはどうしても政党の立場に縛られて、自由な発言ができないから、果たしてどこまでその人の意見、考え方として聴くことができるか、どこまでが政党の意見であり、どこまでが個人の意見であるかという区別が非常に難しい。むしろそういう人はこの際入れないで、社会学者と自然科学者が集まって討議したらどうか、という示唆があったので、そういう方向でことを進めたように承っております。一九四八年（昭和二十三年）の九月の段階においては、東京と京都にそれぞれ部会が結成されました。東京では法政部会、経済部会、文科部会、それから自然科学部会。京都では法政部会、経済部会、文科部会、計七部会が設立されました。そして各部会毎に討議がされました。その段階で私は最初から加わっておりました。恐らく私などが最年少だったろうと思います。一番の長老は安倍〔能成〕先生、大内〔兵衛〕先生、和辻〔哲郎〕先生——そういう方々、京都では末川〔博〕先生のような方です。

各部会の報告というようなものができまして、それを持ち寄りまして一九四八年（昭和二十三年）の十二月十二日に、東京の明治記念館において、東西の合同の討議——討議会を催したわけです。その名前は「平和問題討議会」と言われていたと思います。翌一九四九年（昭和二十四年）の三月の『世界』が全頁を平和問題特集に当てておりまして、そこにユネスコの報告、その報告を受

けた「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」、それから各七部会のそれぞれの報告、それから「平和問題討議会」の議事録というものが掲載されております。特に討議会などは今日、皆様が御覧になったら、当時どうということが討議されていたのかということについて、いろいろな問題がそれぞれの専門によって出て来て、賛成すると否とを問わず面白いのではないかと、思います。これがはしりであります。

それ以後、同じ年の十二月に、この時には「平和問題談話会」という名称で、非常に具体的な、日本の講和の問題がはじめて取り上げられたわけです。ここで「講和問題についての平和問題談話会声明」というものが発表されました。それが翌一九五〇年（昭和二十五年）の二月に『世界』に掲載されました。その「声明」に加えて、補足として東京の総会及び東西の連合総会における少数意見を附した討議の論点の要約が掲載されました。このユネスコの声明とそれを受けた日本の科学者の声明、それから講和問題についての声明と、この三つの声明を『世界』の一九五〇年の四月号に別冊付録として載せたわけです。これが「三たび平和について」に至るまでの非常に外面的な前史であります。

\*

最初の「声明」——東京の明治記念館における討議及び声明——というものは、特別の政治的意味は持たなかったのでありますが、広く読まれました。一九五〇年の二月に発表されました講和問題についての声明は、批判を含めて非常に大きな反響を呼んだわけです。というのは、ここではじめて「全面講和」の要請、それから「中立」——日本の道は二つの世界に対する中立の立場以外にないという考え方——、それからいかなる外国に対しても軍事協定を結ばず、また軍事基地を提供しないという、三つの趣旨がこの声明に盛り込まれたからであります。つまり非常にホットな、具体的な戦争と平和の問題に対してどう対処するかという、アクチュアルな、明確な一つの線と言いますか、説を打ち出したわけであります。

この「講和問題についての平和問題談話会声明」は都留重人氏によって英訳されまして、外国の主要な大使館、公使館及び主要な外国新聞の特派員に配布

されました。おそらく国内においていろいろな立場の学者が寄って、未だ占領下にあった日本の講和問題について、具体的な発表をした最初のものでないかと思えます。そのときにこれはいろいろな反響を呼びました。例えば、当時団体等規制令というものがありまして、政治団体は全てのメンバー、資金を特別審査局に届け、その変更もいちいち届けなければならず、これに違反したら処罰するという規制令がありました。果たして「平和問題談話会」が団体等規制令に該当するかどうかということで、特審局あたりからしばしば“お訊ね”というものがあつた。これは占領軍の意向を受けていると思えます。それに対して談話会はもちろん討議をしまして、安倍先生が議長でしたけども、学者の集会であり、われわれが研究の結果到達した結論を発表したものであつて政治団体ではない。したがつて団体等規制令によつて届け出をする必要はない、ということに意見が一致しまして、届け出をしなかつたわけです。それはそのまま済みました。けれどもそれは最初の「声明」と違つていろいろな意味での波紋を呼び起こしたことの一つの例であります。

ところがここでまた新しい大きな要素が日本の状況の中に出で参りました。それは一九五〇年の六月に勃発した朝鮮戦争であります。日本に与えた衝撃というものは、非常に大変なものでした。二つの世界の対立ということが、——アメリカの占領下にあつたとはいえ——、未だ何か遠いもののように思われていたにもかかわらず、すぐ隣の朝鮮で冷戦が熱戦に転化したということは非常に大きな衝撃であります。

朝鮮戦争が持つていた戦後史一般に対する意味というものは、如何に大きく見ても見過ぎることはないと思えます。例えばパージの問題であります。パージ、追放といへばそれまでは何を意味していたかということ、超国家主義者及び軍国主義者に対するパージを意味していたわけであります。ところがこの前後、一九五〇年の半ば——六月を契機として、その意味が全く逆転するわけあります。この五〇年の二月に、東京都の教員——大学以外の高等学校以下の教員に対するレッドパージが始まっています。それから五月にはイールズ事件が起こる。占領軍が派遣しましたイールズ博士が“共産主義というものは学問の自由というものを本来的に認めないのであるから、共産主義を奉ずる者は、大学



教授にふさわしくない”という講演を、方々の大学でして廻りました。東大は拒絶したのですが、東北大学でやったところ、学生がイールズ博士を取りまいて騒ぐという事件が起こりました。朝鮮戦争の勃発と殆ど相前後してアメリカ占領軍の総司令部によって、日本共産党の中央委員のいっせいのページがおこなわれます。次いで朝鮮戦争の勃発間もなく国連軍が形成されます。つまり、アメリカが朝鮮戦争において非常に得をし、ソ連が決定的に不利になったというか、——ソ連の外交として私は失敗したと思うんですけども——常任理事国として拒否権を発動できる立場にいるにもかかわらず出席しなかったために、北朝鮮による南朝鮮の侵略は国連憲章違反であるという決議が通りました。したがって今やアメリカの極東軍は国連軍という“錦の御旗”を持つことができたわけです。その国連軍が北朝鮮と相対立して戦争をするという状況になりました。同じ頃に共産党の『アカハタ』の停刊が命じられ、同時に警察予備隊が創設されます。それから放送と新聞における大規模なレッドページがこの頃から開始される。その年の秋になるとトルーマンが対日講和条約の交渉を開始しまして、十月頃に戦争直後の被追放者、ページになった者一万人の解除がなされるのであります。つまり戦争直後のページというのは、さきほど申しましたように、軍国主義者ないし超国家主義の指導者および団体に向けられていたのであります。その人たちの追放が解除され、占領軍によって解放された左の勢力が逆にページされる。ページの意味がここで逆転するわけですね。その一つをもってしても、一九五〇年の中頃というのが非常に大きな転機であるということが分かります。

朝鮮戦争の勃発は、全面講和、日本の国際的位置は中立不可侵であるべきである、いかなる外国に対しても軍事基地を提供せず、かつ軍事協定を結ばないという、「平和問題談話会」の「声明」の三つの趣旨に対する非常に重大なチャレンジであったわけです。いうまでもなく「談話会」は急遽会合を開いて、東京と京都で何回となくこの事態に対して如何に処すべきかということの討議を重ねました。もちろんその中には激しい意見の対立がありました。東京の方がいろんな立場の幅の広い人々を集めておりまして、いっそう激しい討議がおこなわれました。東京の中での意見の調整、それから東京と京都の意見の調整。

京都の「談話会」の人は比較的——比較的ですよ——そんなに意見の違う人でなくて、俗な言葉で言いますと進歩的な人が集まっていた。したがって今度は東京と京都の調整というのがこれまた大変な問題で、私は何回か東京と京都の間を往復したことを覚えています。そういうことを重ねまして、九月によろやく東西の総会でまとめあげた草稿が発表されました。それが活字になったのが一九五〇年の十二月、御紹介のありました「三たび平和について」です。

私はこのときの「談話会」の東京と京都と合わせて五十二人の「共同声明」者の一人に過ぎないのであります。この「共同声明」の第一章「平和問題に対するわれわれの基本的考え方」と第二章「いわゆる二つの世界の対立とその調整の問題」という冒頭の二章、全体のいわば総論にあたる部分の原案の執筆が私であります。これを全体討議に附しまして、若干の修正を施して発表されたものが現在発表されている「三たび平和について」であります。これはしたがって私個人に帰せられるべき論文ではありませんので、さきほど御紹介のありました昔の私の書いたものを集めて出したもの【『戦中と戦後の間』みすず書房】にも収録していないのはそういうわけであります。最近の平和研究者によって二十七年前の声明の内容が注目を浴びようになりましたのは、その関係者の一人としては光栄であり、また面映ゆくもありますけれども。当事者であるだけに、当事者にはこの声明——声明というよりは小さな論文であります、その意味の客観的な評価はできないし、またすべきものとも思いません。ただ皆さんにそうした批判や評価の素材を提供する意味において、この声明が成立した時代のコンテクストを記憶をたどって少しお話ししたいと思います。

\*

この「三たび平和について」は【平和研究】第二号（日本平和学会）に再録されましたので、直接これについて興味のある方はお読み下さい。私は、「三たび平和について」に至るまでの「平和問題談話会」の経過について、それに至るまでの前史と背景について、内容的な問題に触れてみたいと思います。

まず第一に、ユネスコの八科学者の声明も、これを受けた日本の人文、社会、自然科学者の「平和問題談話会」の共同声明、及び各部会声明も、今日往々に

して誤解されますように、戦後のバラ色の啓蒙時代——いわば平和と民主主義というものが合唱というより斉唱として世界にこだましていたような、そういう雰囲気の出産ではなかった、ということでもあります。これは事実の問題……。

〈テープ中断〉

文科部会の部会報告は安倍能成先生自身がお書きになったものであり、したがって非常に尊厳なるリポートになっておりますけれども、実は私が最初に草案を書きましたときは、もっと身近なものから。(笑)宮城音弥さんは東京の文科部会に属してございまして、東京工業大学の学生を材料として簡単なサーベイを用意しまして、それから問題を引き出したのであります。ところがいま隣に居られる教育学者の宮原誠一さんが、労働者に同じようなサーベイをおこないました。これは関西の奈良県下の紡績女工についてやったのであります。ところが経済条件はもとより、地理的に離れた、かなり相違した社会層にもかかわらず、二つのサーベイが非常に類似した結果を示している。そういうことをここで言われているんです。

簡単に結論を申しますと、学生の一五%、紡績女工の二五%が戦争を要求している。しかしここで特に重要なことは、何故に戦争を要求するかということでありまして、その理由の中の三分の一は、アメリカの資本主義が世界の人民の支持を受けないことを示すために、戦争をする必要がある。あるいは資本主義社会を早く倒すために戦争をする必要がある——こういう考え方です。あと三分の一は、どうにかして生活水準を上げて昔の日本のような状態にしたい。このままではとつてもやりきれない、と。最後の三分の一は、要するにこの不安な状態から脱したい、と。こういう理由からでありますけれども、少なくとも学生の一五%が戦争を要求している。戦争をしてどうなるかは分からない。生活はもっと悪くなるかも知れない。戦争は悲惨かも知れない。しかし一%でも、〇・一%でも、いやプロバビリティはゼロでもいい、とにかくどうにかなるかも知れない。戦争でも始まったら、今の行き詰まっている状態がどうにかなるのじゃないかという、ニヒリスティックな気持ちがここに現れている。

これについてももちろん、その実態調査はどこまでリアルであるかということについて疑義が出て、いろいろな質問が出ております。例えば民衆があたか

も戦争を欲しているかの如き言い方は非常にケシカランということが、特に左派の中で強かったのですが、それに対して中野好夫さんが“ただ現在のままの民衆がそのまま直ちに信頼に込め得るかということになると別問題で、かなり疑問ではないか。さきほども宮城〔音弥〕君その他から報告がありましたとおり、ちょっと調査したかぎりにおいても、戦争を積極的に希望する民衆があるのであります。戦火を受けた土地での調査がこれでありますから、さらに戦災を受けない区域などに参った場合、かなり顕著にパーセンテージが増えるのではないか、と思われるのであります”と。こういうことを言われています。こういうところを見ましても、昭和二十三年当時、戦争はもうこりごりだ、戦争なんて空気は全くなかった、というのは現実に反しているのであります。いろいろな状況からして、もちろん中年以上の世代で戦争はこりごりだという空気は相当あったことは事実ですけども、さりとて平和万々歳という、バラ色の啓蒙時代なんて必ずしも言えない、かなり重大な数字であります。紡績女工の二〇%以上が戦争を待望している、大学生の十数%が戦争を待望しているということは、それ自身、ちょっと無視できないことだったのではないかと思うのです。

それから昭和二十三年の東京地方の法政部会の報告の中に「ナショナルとインターナショナルの関連について」という項目があります。この原案は私が書きましたけれど、部会報告ですから数回の討議を経て、部会の承認を得て、明治記念館で発表したものであります。ここでこういうことを言っている。「国家至上主義的思想及びそれを培養する制度が排除されるべきは論を俟たないが、現代世界におけるナショナリズムの問題は甚だ複雑であって、一律的处理を困難にしている。例えば、植民地的搾取からの解放は、歴史的に見ても、また現代においても、被抑圧民族のナショナリズムの興起を伴い、またそれを媒介として遂行されている。こういう民族主義は、もとより帝国主義的大国のジンゴイズム＝好戦的侵略主義と同一視し得ない。結局世界各民族の地域的な特性と歴史的進化の段階的相違から生まれた、現代ナショナリズムのこのような多元的立体的構造——つまり平たいナショナリズムないしインターナショナリズムというものがあるんだけれども、ナショナリズム自身が多層的である（丸山）

——を考慮することなくしては、国際主義の理想は単なる空虚な文句に止まるであろう」と。「さらにわれわれは、民族文化の個性的な多様性は真の国際主義とは矛盾せず、かえってその内容をより豊かならしめることを信じる。むしろ逆に、国際主義の名の下に、特定の歴史的国民的な限定を持った生活様式に直ちに国際的普遍性を与え、これを強制的に実施する傾向」がいけない、ということが言われております。例としては、「満州事変以後国際文化振興の名目のおこなわれた文化的帝国主義のごときもの」というものが挙げられております。これは、引照基準がこれしかなかったわけではありますが、私が記憶している限りは、具体的にはインターナショナリズムの名の下にこの「特定の歴史的国民的な限定を持った文化に……」というのアメリカ的生活様式に直ちに普遍性を与えるのは、インターナショナリズムではないんだということですが、これは占領下で言えないのでこういう表現をとったということです。

もちろんこれをどう評価するかは別の問題であります。歴史というものは単純化されやすいので、何か戦争直後には抽象的な平和主義ないしインターナショナリズムが一般的であって、それがその後だんだん困難に直面して具体的になった、というふうに戦後史は往々説かれますけれども、必ずしもそう単純ではない。初めから、平和の問題というのは容易ならぬ困難性についての切迫した認識があった、ということをお願いしたいのであります。

\*

困難性の切迫した認識ということに関連しまして申し上げたいことは、抽象的平和主義どころか、第一回の「声明」と「三たび平和について」とを比較して顕著な相違は、むしろ第一回の「声明」の方が国内的——何と申しますか——社会的変革の問題と平和の問題とを結びつけて考えている。それに対して「三たび」の方は二つの世界の平和的共存という問題を、それ自身、独自に基礎づけようとしているということでありまして、これは時代的文脈というものを考慮しないでは理解し難い問題ではないか、と思うのであります。

というのは、戦争直後の考え方は、——これは日本だけでなくて例えばユネスコの科学者の声明を見ましても、「平和の問題とは、集団間ないし国家間の緊

迫り侵略をいかに調整可能な範囲内に抑え、さらに進んでいかにしてこれらを個人的にも、社会的にも建設的な目的に指向させ、かくして再び人が人を搾取するときことなからしめるか、という問題である。この目的は単に表面的な改革や孤立的努力によって達成できるものではない。社会組織ならびにわれわれのものの考え方自体における、さまざまな根本的変化が肝要なのである」ということなのであります。社会組織の根本的変化なくしては平和というものはあり得ないんだという方が、むしろ戦争直後における一般的認識でありました。これはどちらが良いか悪いかという問題ではなしに、そういうことを申し上げたいのであります。

つまり戦間期——第一次大戦と第二次大戦の間の戦間期——があまりに短かった。第一次大戦——戦争をなくすための戦争ということが、わずか二〇年間にして第二次大戦を招いたということに対する反省が、世界的に拡がってありました。それから日本の特殊事情を見ますと、御承知のように初期の占領政策は日本を民主主義化することなしには日本の軍国主義の除去はあり得ない。民主主義化ということの意味には、今日では考えられないほど、かなり左——と申しますと語弊がありますけれども、つまり共産党を解放するようなものも含んだような民主化が考えられる。そういう文脈の中で理解されるのであります。したがって第一回の日本の科学者の声明を見ますと、「平和は単なる現状維持によって獲得されるものではなく、現実の積極的改革を俟って初めて確立されるものである。すなわち社会組織および思维様式の根本的変化を通じて——ここはユネスコ声明と同じ表現です（丸山）——人間による人間の搾取が廃止される時にのみ平和はわれわれのものとなることができる。もとより、この変化の方向と方法はなお今後の研究に俟つところが少なくないにしても」という留保は附しておりますけれども、平和と現状維持とが相容れないことは明瞭である。平和は現状維持ではないんだ、ないどころか、社会組織の根本的な変革を含むんだ、という認識の方が一般的だったわけですね。

で、この声明は [第三項で次のように記しています。]「生産力の向上および資源の利用に計画と調整を施して、最大限の社会的正義を実現することは、明らかに戦争の防止と平和の確立にとって基礎的条件をなしている」と。ここに

私は、当時における平和問題というものが、日本の社会の、広義で言えば、社会主義化の方向と不可分のものとして考えられていたということの——これも良かれ悪しかれ——一つの例証があると思うのです。

つまり、平和問題の戦後の発展というのは、こういう社会主義的変革の問題と不可分であった平和の問題から、独自の平和問題の次元というものを発見してゆくプロセスなのであります。この点を歴史的に理解しなせんと、戦後の平和問題研究の歴史というのは十分に理解できない。

「三たび平和について」が社会変革の問題を看過して、そして二つの世界の共存の根拠づけをしているとか、あるいは、この段階ではまず平和共存論が根拠づけられる、次に、例えば植民地戦争、ヴェトナム戦争などの経験を経て、社会構造との連関——社会構造の変革の問題と、あるいは植民地解放の問題と平和の問題とが結びつけられるようになったと見るのは、少なくとも歴史的事実ではない。事態はむしろ逆なのであります。平和問題というのは独自の、——国内的ないし社会の社会的変革の問題とは独自の次元をなしている。独自とは無関係ということじゃないです。無関係ということじゃなく、少なくとも独自の次元を発見してゆく、そういうプロセスであったというように見た方が歴史的には正解なのであります。

もっと具体的にこれを申しますと、当時の知識人において非常に優勢を占めていた左派——俗な言葉を使って恐縮ですが——の知識人の間に支配的な考え方、及び共産党によって代表される考え方はどういう考え方であったかと言いますと、戦争勢力と平和勢力との間に「中立」ということはあり得ない、こういう考え方です。その場合の戦争勢力というのは帝国主義諸国家なんです。平和勢力というのはソ連、中国及び東欧諸国——つまり具体的にはいわゆる社会主義国。この根拠づけは言うまでもなくレーニンの帝国主義論でありまして、資本主義の現在の段階は必然的に帝国主義戦争を招来する、という考え方です。したがって資本主義体制というものは帝国主義戦争とは不可分である、という考え方。したがって平和の確立ということは資本主義の排除なしにはあり得ない、ということに論理的にならざるを得ない、そういう考え方。もう一つは、国際的階級闘争という概念。国際的にブルジョアジーとプロレタリアー

トとが階級闘争をしている、ということになれば、その階級闘争というもの、国際的階級闘争に目をつぶるのはことごとくブルジョア平和主義になります——絶対的非戦論をはじめとして。国際的階級闘争の推進ということがむしろ平和の保障——こういう考え方ですね。これが大体左派及び共産党を中心とする考え方です。

これと全く陣營的には対立している右派、保守派の考え方はどうかと申しますと、共産主義者ないし共産主義国家によって唱えられている平和共存というのは、一時的戦術に過ぎないものである。全体主義は、ファシズムであると共産主義であるとを問わず、全てを力関係に還元する考え方である。そうである以上、力関係が自己の陣營の側に有利と見れば、必ず武力衝突を賭しても共産圏を拡大しようとする。これが彼らの言う国際的階級闘争の意味なんだ。したがって共産主義ないし共産圏というものは必然的に彼らなりのエクспанションニズム＝拡大主義、膨張主義を伴うものである。同時に、共産主義者が唱える国際的連帯とは、具体的にはプロレタリアートの連帯ですから、それは資本主義国の内乱を助長し、煽動することを意味する——世界革命。したがって、内政不干渉の原則ということは、彼らにとっては原理的に認められない。むしろ国際的連帯の名において他国のプロレタリアートによる内乱ないし革命を助長し、援助するということが、必然的にその原則から出て来る。したがって、彼らの言う平和共存というものは“まやかし”であり、一時的な、戦術的なスローガンに過ぎない、——そういう考え方です。

そうしますと、非常に奇妙なことに、左派知識人及び共産党によって唱えられた革命のイデオロギー、それに対する反共のイデオロギー——具体的に言えば全体主義への対抗イデオロギー——というものは、表裏一体の関係になっているわけです。そしてその両方ともイデオロギーというものが優先している。そこでこの革命のイデオロギーと全体主義への対抗イデオロギーという両方から、どうやって平和の次元というものを隔離するか。隔離しなければ、例えば資本主義者あるいはブルジョア民主主義者と共産主義者を抱えた平和運動というものは成り立たないわけですね。その間の連携というものはあり得ないわけです。したがってこの両方のイデオロギーからどうやって平和の次元を隔離して、



その隔離することを通じて平和共存の可能性というものを基礎づけてゆくか、ということが「平和問題談話会」の非常に切迫した課題であったわけです。これが非常に緊張した討議がおこなわれた所以でありまして、今日顧みまして、よくもまあ一致までこぎつけたものだと思うくらい、激しい緊張でした。特に朝鮮戦争勃発となりますと、朝鮮戦争をどう見るか。もちろん公式の見解は北朝鮮の侵略ですね。したがって、これはさっき言った“対抗イデオロギー”が正に“それ見ろ”と、“アカのエキスパンショニズムが端的に現れているじゃないか”と。それに対して片方は、“あれこそ帝国主義のイデオロギーの現れである。帝国主義が戦争の勢力であることの証明である。あれはアメリカ帝国主義と南朝鮮が組んでやったものである”——そういうことになるわけです。

そうやってだんだん、だんだん同時に一致してゆく。奇妙なパラドキシカルな一致がある。で、「平和問題談話会」の中にもその二つの強力な〇〇（不明）がある。その中から、その二つの考え方を抱え込んで、平和共存を、——つまり平和問題の独自性、具体的に言えば二つの世界の共存の可能性というものをどうやって基礎づけるか、というのが「平和問題談話会」が模索した方向であり、その具体的な現れが「三たび平和について」であったわけです。

二つの世界の対立ということ自身は、さきほど申し上げました決してバラ色の啓蒙——平和万々歳から発したものじゃないということ、それは非常に冷厳であり、今日容易ならない事態にあって、いつ戦争になるか分からないということは、一九四九年の段階から非常に明白に現れておりました。これは議事録なり声明をお読みになれば分かります。ユネスコとか国連とかが破産に瀕している、というのがしばしば出て来ます。したがって、決して蜜月的な世界、国際政治の状況じゃなかったわけですね。ただ消極的には、未だ冷戦の段階に止まって熱戦に転化していない、そういう条件がありました。二つの世界がありながら平和共存は可能であるということを言うに留まっていたのに対して、二つの世界とは何なのだ、一般に流通しているこの言葉のセマンティクス＝意味論を試みたのが「三たび平和について」であります。これは今までの声明から一つの新しい段階がそこで生じた、とされています。つまり、意味論をやりませんと、例えば経済学者——大部分はマルキシストの経済学者ですが——は、

二つの世界とは資本主義体制と社会主義体制という社会体制の問題としてとらえるわけです。米ソの対立体制間の冷戦——社会体制の間の冷戦と見るわけです。にもかかわらず、もちろん平和共存を説くわけです。説くわけですが、究極的には社会主義が勝利すると見るわけですから、一時的なものであります。そうすると他方から見るとそれは戦術に過ぎないじゃないか、と。——こういうことになるわけですね。特に東京において有力であった保守的自由主義者——安倍先生とか和辻先生という方々は、二つの世界の対立を自由主義対共産主義、または全体主義の対立と見るわけです。

何とかして共存を基礎づけようとするわけですが、資本主義対社会主義の体制の対立として見るか、それとも自由主義対全体主義の対立として見るかによって、まるで意味が違って来る。しかも両方に共通していることは、アメリカないし英米的な体制を自由民主主義の権化として見るわけです。自由民主主義とアメリカないし西ヨーロッパの体制というものをアイデンティファイ [同一視] する。他方は、 Kommunismus ないし Sozialismus というものとソ連ないし東欧圏及び中国を含めて殆ど同一視する。つまり、そういう国家ないし国家群は、社会主義というイデオロギーを具体化したものと見るわけです。その点では奇妙な一致があるわけであります。

果たしてそうであるか。イデオロギーの次元と具体的な体制の次元、さらに具体的な国家の次元というものはそんなに同一視できるのか。——そこでどうしてもセマンティクスの問題が出て来るわけです。これは単なる知的興味の問題ではなくて、それが——セマンティクスが打開されませんと、かくも違った立場の知識人の平和についての協力というものは、現実的に不可能ですし、今日でもそうだろうと私は思います。そこに平和問題というものの持っている困難な面があった、と思うのです。

\*

時間がありませんので端折ります。具体的なエピソードはたくさんありますが、そういうことは話すときりがありませんし、問題点の所在を申し(不明)……。少なくとも結果論として、今日から見ると、顔ぶれを見ると分かり

ますように、想像できないほどイデオロギーの違い、政治的立場を異にする人が「平和問題談話会」という一つの集団に結集して、極めて切迫した状況——さっき申しました朝鮮戦争——の下で共通の結論を出した。尤も第一回の声明からの、例えば田中耕太郎先生、田中美知太郎先生、……等若干はやはり第三回の声明からは脱落しています。第二回の声明では少数意見に属しましたけれども、第三回の声明ではあまりにはっきりと問題が具体的に切迫しておりましたので。和辻先生なんかが私に“丸山君ソ連をそんなに信用できますかね”、“ソ連を信用してるわけじゃありません”と思わず大声を出したことがありましたけど、それぐらい切迫してました。他方、京都は左派の集りでしたね、非常に参りましたね。(笑)さっきの戦争勢力と平和勢力との間に中立はあり得ないという主張で、しかも南朝鮮が侵略したという立場が強いわけですね。そういうことに対して、なお平和共存の可能性及び将来の展望——つまり米ソが今日、如何に対立しようと、冷戦の方向をとるにしろ、平和の方向をとるにしろ、意外に両体制は近似してくるんじゃないか、ということとか、中国は、今日こそ毛沢東の向ソ一辺倒で、支持する方も反対する方も一枚岩。[しかし]それは必ずしも一枚岩ではないんじゃないか、というようなことを言うことは大変なことだったのですが、にもかかわらず、何とかかんとか通ったわけです。

\*

どういう訳なんだろう、ということを考えてみますと、非常に広い背景としては、戦争直後の知識人の間に共通していた或る感情があったと思います。それを私は——この問題に限らずに言うんですけども——“悔恨共同体”と呼んでいるのです。これは日本のインテリゲンチヤルズという問題を、サルトルが来たときに強引に『レ・タン・モデルヌ』に書けと言われて、半分以上書いたところで大学紛争になってしましまして、それどころじゃなくて、これは途中で打ち切っちゃったんですけども、——その中で私が使った言葉です。[参照「近代日本の知識人」『丸山眞男集』第十巻所収]つまり日本の知識人が明治維新後に、一つの専門分野なり専攻なり職業なりを超えて、インテリゲンチヤル・コミュニティ=知的共同体を結成した時期が三つあった、というのが私の仮説

です。

第一の時期は明治維新直後から二〇年代ぐらいまでです。これは明六社の結成とかいろいろなことがあるのですが、中江兆民の『三酔人経綸問答』——この頃大変有名になりましたが——、南海先生と豪傑君と洋学紳士が徹夜して国事を論ずるわけですね。各々立場が違って——主に国際政治の問題ですけれども。非常にアクチュアルな、しかも今日読んでもお生々しい問題が論じられている。あの三人は初めて会って、徹夜して論じて気がついてみたら暁になっている。“もう暁になったから帰ろう”と言って帰った。最後の結びの言葉は、その後聞くところによると、洋学紳士は北米に行き、豪傑の客は上海に行き、南海先生は「依然として唯、酒を飲むのみ」と。非常に象徴的な——中江兆民が意識している以上に象徴的なんです。何故ならば、洋学紳士の行路——その後の行路というのは、一つはビュロクラシー＝官僚制の中で立身出世するコース。もう一つは、例えば幸徳秋水などの社会主義派。これはともに洋学紳士の道です。それから豪傑君——これは大陸浪人。南海先生は非常に複雑で、一つは隠逸ですね——ドロップ・アウトの道、まあ文学者——自然主義文学とか。もう一つは或る一群のジャーナリスト。何故象徴的かと言うと、明治初期の知識人というのは、職業別に見ますと大部分は大学の先生か、ジャーナリスト——新聞記者と独立の言論人、そういう人が多い。その中には官に仕える者あり、仕えない者もある。そこで明六社の中では官に仕えるべきかどうかという有名な学者についての論争が起きますね。しかし、在官している者も在野の者も、明六社に集まるときには自分の職業によってではなくて、自分がよって立つところの知識人としての立場——それによって集まる。そういう一つの連帯意識というものがそうじゃなくなって、各々オーガニゼーションの中に吸収されてしまう。何をやっているというより、何処の大学教授であるとか、あるいは何処の新聞記者であるとか、所属性の方が大きくなる。あとはドロップ・アウトですから、ドロップ・アウトと組織人との間のコミュニケーションがなくなる。組織と組織との間のコミュニケーションがなくなる。こういうふうにして、『三酔人経綸問答』の最後の、洋学先生と豪傑君と南海先生が再び会うことがなかったということが、すでに日本の知識人の運命に非常に宿命的な意味を持ってい

た、と私は思うのです。

これを再び結びつけた第二の時期というのが、私はマルクス主義の到来であると思います。というのは、マルクス主義の考え方というのは——賛成すると否とを問わず——“オレは政治学者である”“オレは経済学者である”“オレは文学者である”とすましておれない、一つの総合的な世界観です。あの総合的な世界観によって特に〇〇（不明）と制度、イデオロギーという考え方によって、社会学者はもちろん、文学者までが社会体制の問題、世界観の問題——そういうことを考えざるを得ない。これは前に書いたことがあるので繰り返しますが、文学者までがどんなに大きな衝撃をマルクス主義から受けたかということは、必ずしも実際の階級対立が激化したとか、そういう現実の反映ではないのであります。御承知のように日本の労働者の組織率は六%を出たことはなかったわけですね。殆ど戦前におけるマルクス主義の問題というのは、「思想問題」という言葉が象徴しているように、思想の問題であります。「思想検事」なんて訳せない言葉があるわけですね。「思想問題」というのはこの頃世界的な言葉になっている——ザ・プロブレム [・オヴ・ソウト] と……。しかし非常に言葉としておかしいものです。「思想検事」はなおさらおかしい。しかし正にそういう言葉に現れているような何ものかがあったわけですね。そこでマルクス主義というものによって、組織によって分断され、スペシャライゼーション＝専門化によって分断された知識人が再び共通の基盤を持つ。インテレクチュアル・コミュニティ＝知的共同体というものが、反マルクス主義とマルクス主義とを問わず、知識人に見えない知的共同体——同じ知性の王国——の住民であるという意識が広がった時期が、大正の末期から昭和の初期。これが潰されますね。

第三が私の言う“悔恨共同体”。これはそれぞれ悔恨の性質は違います。けれども、戦争に対して積極的に協力した者も、あるいは消極的に抵抗した者も、あるいは獄中十八年組はどう考えたかは別として、少なくとも“これでよかったんだろうか”と。例えば、積極的に旗を振らなかった者も“一体これでよかったんだろうか”と。窓を閉めて、窓の外を嵐が吹いていても、窓の中に嵐が入って来なければそれでいいんだ、という考えでよかったんだろうか、ということ

ですね。われわれはインテレクチュアルズとして、やっぱりなすべきことが他にあったのではないか、それを怠ったのではないか。その後の非常にすり切れた言葉を使えば“知識人の自己批判”というものが、驚くべく広範に拡がっていったわけです。したがって、そういう言葉こそなかったけれども、あの大学紛争のときに全共闘の言った“専門馬鹿”ということと同じ自己批判があらゆる分野にあった。“私の専門はこれです”——これでおしまいですね。“他のことは知りません”ということですむんだらうか。知識人としての社会的な役割は果たせるだらうか。そういう意味で、私は悔恨共同体と言うわけです。

これは「平和問題談話会」の、例えば声明の前文に「翻って、われわれ日本の科学者が自ら顧みて最も遺憾に堪えないのは、われわれも夙にこの平和声明に含まれている如き見解を所有しておったにも拘わらず、わが国が侵略戦争を開始した際にあつて、僅かに微弱な抵抗を試みたに留まり、積極的にこれを防止する勇気と努力とを欠いていた点である」と。ここに集まった人々はリベラルないし左派ですから、戦争中は大体被害者。積極的な便乗者ないし協力者はパージされましたから、こういうところには加わらないし、また加えない。ですから「僅かに微弱な抵抗を試みたに留まり」という表現になっているわけです。したがって「われわれ科学者は、国民に信頼し彼らと共に歩む時にのみ、初めて何事かを為し得るものである」と。大衆組織とどういう関係に立つかということは、プラスだけでなくマイナスもありますけれども、そういうことが広範に提起されたということも、知識人が独善的な態度をとってはいけなという考え方が普遍的にあったからです。羽仁五郎さんが討議の中で、まず第一に戦争責任の問題を明らかにしなきゃいけないということで、日本の科学者の場合にいきなり戦争と平和の問題を論じられる資格があるか、まずそれを問わなければいけない、学者の節操という問題を問わなきゃいけない、ということを一席打ちました。安倍議長が“考え方によってはわれわれここに集まった者が、学者としての節操を羽仁君から詰問されているということにもなっているわけでありますが、これはどういうふうに扱っていいものか”（笑）というのが議事録にあります。羽仁さんが“いや、そういう意味じゃない”と。（笑）少なくとも消極的には自己批判、積極的には知識人というのは一体何で社会に貢献

するのか、ということです。こういう意識が<sup>びまん</sup>瀰漫していて、もしその意識なしにはこれだけの違った立場の人の協力ということはできなかったのではないか。決して個人の努力とかそういうことだけでは説明できない何かがあったのではないか、と私は思います。

\*

で、これが知識人の問題であると同時に日本の問題ということに関係してくるわけです。つまり日本は現代の情勢にどう対処するかという、そういう問題の立て方ではない。今や身に寸鉄を帯びない日本が、世界に対して何を貢献できるのか、世界に対して発言できるとしたら何を発言できるのか、ということですね。何をコントリビュートできるのか——こういう考え方ですね。考え方の根本が、まず世界情勢があって、それに対して日本はどうしたらいいかという考え方ではなくて、日本はいわばナッシングになったという意識ですから、ナッシングになった日本が一体何をもって世界に貢献するのか、——それには平和問題しかないじゃないかという、その意識ですね。これがあらゆるイデオロギー的立場を超えてなければ、協同した結論に到達することは不可能だということ。

言い換えれば、スペシャライゼーション＝専門化のかもす問題。何のための学問か——ソクラテス以来問われている問題ですけれども、それがここでまた問い直されたということです。これは解決のつく問題ではありません。つまり“専門馬鹿”——という言葉を使うならば——それを避けようとするればディレクタントイズム。この二つの谷間の非常に細い道を歩かなければいけないのが、学問を職業とする者の宿命ですね。ディレクタントが良いとか悪いとか言うんじゃなく、第一級のディレクタントの方が第三級の専門家より、(笑)偉い、偉くないの問題じゃないです。問題は、専門馬鹿に陥る専門家とディレクタントに陥ることの、この谷間の非常に細い道を渡ってゆくということですね。どこまで明確化してるかは別として、そういうことの空気が参加者の間にあったということが、こういう異なる立場の結合を可能ならしめたのではないか、——今から思えば……。それほど当時を思い出しますと“よくもここまで来た

なあ”と。

もちろん批判されるべきところは、今日から見ればいくらでもあると思う。それは皆さん自身がご自由に批判されればよいと思いますが、私が今日顧みて思い出すのはそういうことであります。

悔恨共同体であったということは、同時にまたマイナス要因ですね。というのは悔恨共同体というのは後悔の共同体ですから、戦争の経験ということと不可分ですから、これは歳月とともに——広島じゃないですけども——風化するわけです。悔恨によって結びついているわけですから、その切実な意識がなくなると、また——さっき言った南海先生じゃないけども——再び相会わず、と。それぞれの組織の“タコ壺”の中に入っちゃうという状態がまた来るわけですね。そういう問題を残しているということです。

どうも大変まとまらない話を。(拍手)



